

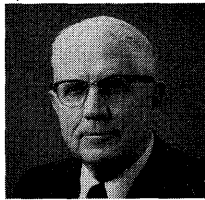
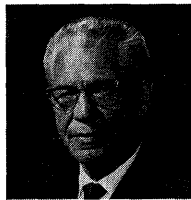
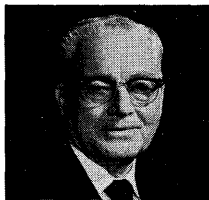
聖徒の道

1980年2月20日発行（毎月1回20日発行）第24巻第2号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道

2 1980





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー

国際機関誌

編集人：M・ラッセル・バラード・ジュニア
編集主幹：ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：キャロル・D・ラーセン
子供の頁編集：コニー・ウィルコックス
デザイナー：ロジャー・ギリング

「聖徒の道」

赤松成次郎（翻訳部長）

も く じ

きょう、主に仕えなさい……………マリオン・G・ロムニー……………1
 キリストを知る……………デビッド・A・ウェトン……………3
 人生の仕事……………スターリング・W・シル……………7
 翻訳を助けるコンピューター……………8
 だれよりも高く……………マリオン・D・ハンクス……………10
 息子、わが友……………ジェイ・M・トッド……………14
 質疑応答……………16
 この世の苦難……………ホーマー・G・エルズワース……………18
 天のお友さまへの報告……………N・エルドン・タナー……………21
 クレイグの見つけた信仰……………ルイス・スプラント……………22
 ふたりの友だち……………クラウディア・レミングトン……………24
 おもちゃばこ……………28
 人のために……………スコット・スノー……………29
 タクシーを押しした日……………ジェイコブ・ディエガー……………30
 知らない人ばかりのバスで……………エリス・リチンズ……………32
 何としても戒めを守りなさい……………ジーン・R・クック……………36
 啓示とあなた……………ハロルド・B・リー……………38
 ローカル・ニュース……………44

表紙の説明

英国のプレストンで伝道を始めるヒーバー・C・キンボール。
リチャード・ミュレーイ画。

聖徒の道 2月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
印刷所 株式会社 精興社
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
定 価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0427 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 ^{まつじつ}末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

きょう、主に仕えなさい

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

今月号のメッセージで私が皆様にお伝えしたいのは、皆様がああ、のヨシュアに倣って主に仕える固い決意をし、それを実行に移していただきたいということである。ヨシュアは、イスラエルの民にこのように言っている。

「……あなたがたは主を恐れ、まことと、まごころと、真実とをもって、主に仕え、あなたがたの先祖が、川の向こう、およびエジプトで仕えた他の神々を除き去って、主に仕えなさい。

……あなたがたの先祖が、川の向こうで仕えた神々でも、または、いまあなたがたの住む地のアモリびとの神々でも、あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」
(ヨシュア24：14—15)

ヨシュアは、この名言の中でふたつの点を力説しているが、その重要性はいくら強調してもし過ぎることはないと思う。ヨシュアが強調した2点とは、ひとつは主に仕えることであり、ふたつ目はそれを「きょう」実行するということである。ヨシュアのこの訓戒あるいは固い決意のことを深く考えていると、アミュレクのあの偉大な宣言が心に浮かんでくる。

「現世は、人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。現世の生涯は、人間が各々働きを遂行せねばならぬ時期である。

……私はあなたたちがこの世を去る時まで悔改めを引き延さないようにねんごろにすすめる。永遠の来世に行く準備ができるように私たちに与えられている現世の生涯の光陰を有益に用いなかったならば、後から夜のような暗やみの生涯がやってきてそこへ入ったら何の働きもできるはずがない。

あなたたちは、このおそろしい危機に陥ってから『私は悔い改めて私の神に立ち帰る』と言うことはできない。あなたたちは本当にこう言うことはできない。なぜならば、あなたたちがこの世を去る時あなたたちの肉体を離れる霊は、永遠の来世に於て再びあなたたちの身体に宿る力を持っているからである。

あなたたちが、もしも悔改めを引き延ばして死んでしまうならば、すでに悪魔に従ったのであるから、悪魔はあなたたちに自分の部下と言う刻印をおす。従って主の『みたま』はもはやあなたたちから離れて再びあなたたちに宿らず、ここに於て悪魔は全くあなたたちを支配する権能を得る。これはすなわち悪人の最後の境涯である。」(アルマ34：32—35)

アルマはその12章の中で、アミュレクが「現世は、人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である」と述べた根拠を明らかにしている。つまり、この世の生涯は私たちの始祖アダムとイヴに与えられ、私たちには「試しの時期となり、神に逢う用意をする時期となり、また……死者の復活の後に来る永遠の生命を受ける用意をなすべき時期となった」（アルマ12：24）ことを指摘している。

さらに、アルマは贖いの計画がアダムに示されたことを明らかにし、この贖いの計画は私たちにも示され、アダムがそうであったように、私たちも悔い改めて福音に従った生活をするならば、主のみもとに帰ることを許されると説いている。

アルマはまた、私たち人類に関してこう述べている。「神は贖いの計画を示したもうてから、悪を行ってはならないと言う法令を人類に下したもうた。この法令に伴う罰は第二の死である。第二の死とは義しいことから永遠に断ち切られる有様となることを言う。このような死に逢う者は贖いの計画の能力も及ばない。それは神のもちたもう最高の徳に照らして正義の働きをさまたげることができないからである。

しかし神はその御子の御名を通して人々に勧めたもうた（これがすなわち備っている贖いの計画である）。すなわち『汝らもし悔い改めてその心をかたくなにせずば、われはわが生む独子によりて汝らを憐むべし。

よりて悔い改めてその心をかたくなにせざる者は、わが生む独子によりて罪の赦しを得さする憐みを求むる権利を受く。かかる者はわが安息に入ることを得。

されど、およそその心をかたくなにして罪

悪を犯す者は、われは怒りてこれをわが安息に入らしむべからずと誓う』と。（アルマ12：32—35）

年齢に関係なく、大切なことは一人一人がきょうをどう生きるか、言うなれば毎日毎日どう過ごすかということである。

アルマは息子のヒラマンに、若いうちに物事を決意するようにと、次のように説いている。

「わが子よ、忘れずに青年の時智恵を得よ。青年の時から神の命令を守ることを習慣とせよ。

汝の要する一切の助けを神に祈り求めよ。何事でもすべて主のために為せ。どこへ行くにも主のために行け。常に主を念頭に置いて心の愛情をとこしえに主へ向けよ。

汝のする一切の働きについて主のみこころを伺え。そうすれば主は汝の為になる善い誠めを与えたもう。眠っている間も主が見守りたもうよう夜寝る時には自分の身を主に任せて寝よ。そして朝起きる時には神に感謝する念を胸に満せ。このようにすれば終りの日に高く挙げられる。」（アルマ37：35—37）

アルマはまた、息子のコリアントンへの話の中でもひとつの重大な真理に触れている。

「お前は、もはや回復に関することを教わっているから、このまま自分の罪深い境涯から幸福な境涯に回復されると思ってはならない。罪悪は決して幸福を生じたことはない。」（アルマ41：10）

現世はもちろんのこと、来世においても平安と幸福を得る確かな道は、きょうも、明日も、あさっても、毎日主に仕えることである。

二 の地上に生を受けた人は、遅かれ早かれ、イエス・キリストが神の御子であることを知る機会が与えられる。聖典によれば、キリストが再臨される時、神の御子のしるしははっきりと目の前に明らかにされるため、人は「すべてのひぎをかがましめ、……ことごとくの舌はイエスはキリストなりと告白」と言われている。(教義と聖約88：104参照)

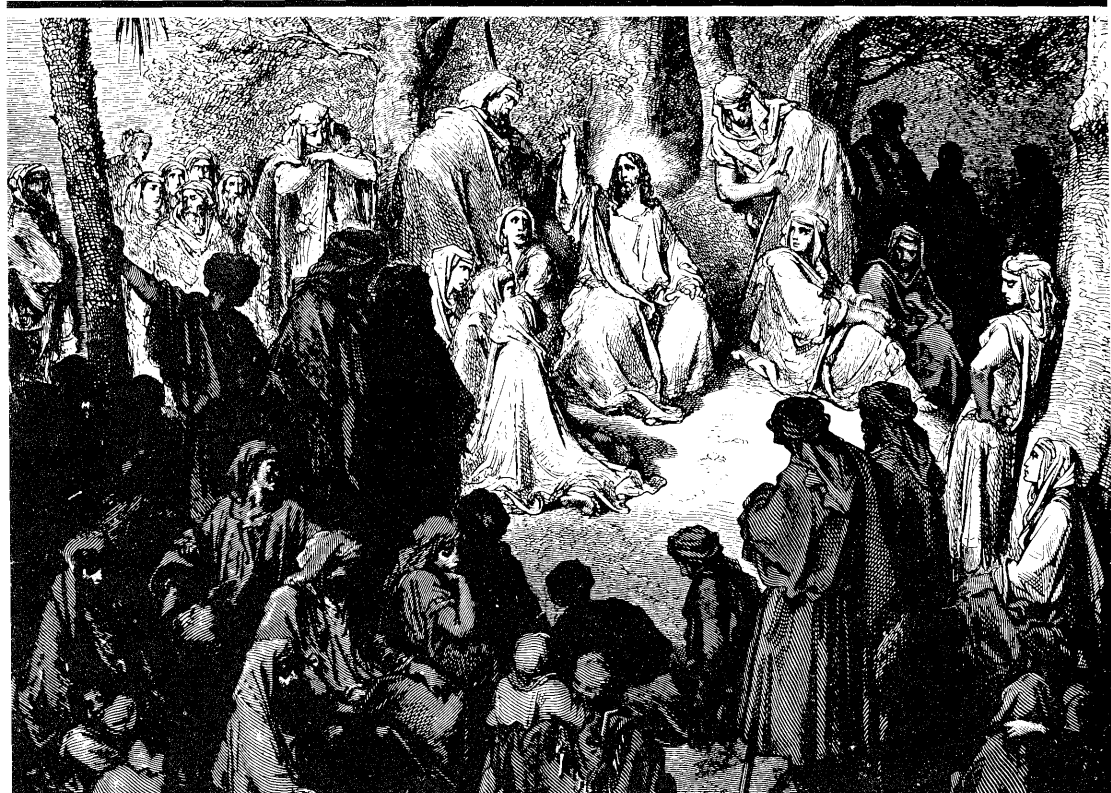
そうだからと言って、キリストについてす

べての十分な知識が得られるわけでもない。救いをもたらす知識は、祈りと瞑想によって、主との交わりを深めようと努力するところから得られるからである。

救い主は次のように言われた。「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ17：3) この言葉に注意していただきたい。私たちが永遠の生命を得るためには、神とイエス・キ

キリストを知る

デビッド・A・ウェトン



リストを知ることであり、御二方に関する何かを知ることではない。両者の間には大きな違いがあると私は思う。

ブリガム・ヤング大管長は次のように述べている。「天父と御子イエス・キリストが私たちに求めておられる最も重要かつ偉大な条件とは、……イエス・キリストを信じ、イエスが救い主であることを認め、キリストを求め、キリストから離れず、キリストを友とすることである。救い主と心を交わし、絶えず交流が持てるように行動していただきたい。」

(*Journal of Discourses* 「説教集」 8 : 339)

私は人と個人的に親しくなることに深い関心を持っている。特にその人について話されたり、言われたことがお互いの関係を価値あるものにしてくれそうな時にはそれがはっきり言える。人々に対するイエスの思いやりから見て、イエスが持っておられる、次の4つの属性こそ、私が熱心に求め、交わりを深めてゆくべきものであると思う。

その第1の属性は、救い主が私たち一人一人をよく熟知しておられるということである。救い主は人々の心の願いと内なる霊性を見抜かれ、仲間から軽べつされ追放された人々と親しくなられた。最初の十二使徒定員会を組織される時も、貴族の家やサンヒドリンの堂々たる会議所には行かず、海辺の粗末な釣り舟や人々からさげすまれていた取税人のところに向かわれた。

1831年、今から約150年前、主が聖徒たちに向かって述べられた言葉を聞いていただきたい。教義と聖約に次のように記されている。

「見よ、而して聴け。此所に寄り集りたるわが教会の長老たちよ。汝らの祈りはわれこれを聞き、汝らの心はわれこれを知り、汝らの願いはわが前に達せり。

見よ、見よ、わが眼は汝らの上にある。」

(教義と聖約67 : 1—2)

教義と聖約第5章で、主が「わが僕マーテン・ハリス」と述べられたことにも注目していただきたい。主は彼の名前を知っておられた。同様に、第15章ではジョン・ホイットマー、第93章ではフレデリック・G・ウイリヤムスの名前を挙げておられる。聖典に記録された啓示の中で、実に主は65名の人々に特別な指示を与えられたのである。

主は確かに私たち一人一人を心に留めておられる。苦難の時に主のみ腕に支えられていると感じたことが、私の人生に幾度もあった。伝道中に膝をけがして不安に襲われた時、ベトナムで兵役に服するために家族から切り離され、さびしく毎日を送った時、愛する伴侶を失って慟哭(どうく)の日々を送った時、私は静かにささやく声を聞いた。「穏やかなれ」「安かれ」「私はここにいる」「私は知っている」と。その時ほど、甘く安らかに慰めに満ちた確信を味わったことはない。

第2の属性は、御自身の経験から私たちのあらゆる困難や苦難を思いやることのできる救い主の力である。救い主は、誘惑、苦悩、恐怖、嘲笑、虐待などが、どのようなものであるか知っておられた。そして、幾度も人々に大なる憐れみをかけられたのである。

救い主は、人間の受ける最も苛酷(かこく)な苦痛と言われる孤独を経験された。この世での最後の時近くになって救い主が語られた次の言葉に、私は深く心を打たれる。「見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。いやすでに来ている。しかし、わたしはひとりではない。父がわたしと一緒におられるのである。」(ヨハネ16 : 32)

救い主は拒絶や孤独だけでなく、誘惑をも経験された。パウロは「罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じような試練に会われたのである。」(ヘブル4

: 15) と記している。このことは、救い主と私たちとの関係にどのような重大な影響をもたらすだろうか。パウロはこの問いに次のように答えている。「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。」(ヘブル2: 18)

イエスは生涯を通じて、人々に憐れみを持つように備えられたのである。

ある時、長い説教を終えてから弟子たちにこう言われた。「彼らを空腹のまま帰らせたくない。恐らく途中で弱り切ってしまうであろう。」(マタイ15: 32)そして、7つのパンと少しの小さい魚を取って奇跡的に4千人の群衆に食を与え、彼らの空腹を満たされたのである。この出来事は、主が人々の霊的な必要ばかりでなく、肉体的なことにも心を留めておられることを示している。

主の偉大な憐れみは、私たちがその愛と信頼を受けるにふさわしくある限り、誘惑を受けて迷った時に慰めを与える源となるのである。主が初期の聖徒たちに与えられた次の言葉の中にそのことがはっきりうかがわれる。

「見よ、且つ聴け、汝らわが教会の長老たちよ。〔われは〕人々の弱きを知り、誘惑に陥る者を救う方法を知る……。

われ誠に汝らに告ぐ。……われ汝らを憐まん。汝らの中罪を犯せる者あり、されどわれ誠に告ぐ……われは汝らを憐まん。」(教義と聖約62: 1; 64: 2-4)

十二使徒評議員会会員のヒュー・B・ブラウン長老は、次のように述べている。「私は、これまで幾度となく、手を差し伸べれば神のみ手に触れると感じたことがある。主はすぐ身近におられる慈悲深い御方で、喜んで私の求めに応じて下さり、困難な局面を打開できるように助けて下さった。」(Church News 「チャーチ・ニュース」1975年12月6日, p. 3)

ブラウン長老の証に加えて、イザヤの偉大な予言の言葉にあるように、「ひとりのみどりご」が生まれて「靈妙なる議士」となられたことを証する。(イザヤ9: 6 参照)

救い主に近づこうという気持ちを起こさせる第3の属性は、主の持ちたもう、深く変わることにない完全な愛である。その愛の最も尊い証は、進んで私たちのために命を捧げて下さったことに示されている。弟や妹たちが同じ苦痛を味わわなくて済むように、進んでその激しい苦痛を受けられたのである。その意義を理解していたパウロは、次のように述べている。

「わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」(ローマ8: 38-39)

何と力強い証ではないだろうか。キリストは私たちに永遠の幸福をもたらすために、いかなる代価をも進んで払われたのである。実に神の本質は、他の人々のために進んで犠牲を払うことにある。キリストは、個々の人々がキリストの犠牲を認めるか否かにかかわらず、「目には目をもって償う」という哲学に支配された世界において万人のために自ら十字架に掛かれたのである。私たちにとって、これは何と祝福されたことであろうか。

第4の属性はキリストが持つておられる神の権能である。これこそ一般の人々とはっきりと区別されるものである。キリストは私たち一人一人の成長に深い関心を持っておられるだけでなく、そのために何かを行なう権能も備えておられた。すなわち、人々の生活を変える権能である。確かに私たちは、パウロやアルマのように、文字通り一夜にして生活

を変えられた人々の話を聖典から読むことができる。しかし、このように小さな、人に知られない改宗の奇跡は枚挙にいとまがないほどあちこちにある。

あれはカナダのエドモントンで伝道中のことであった。私と同僚は、冷えきってじめじめした地下室を訪ねた。そこには毎日たばこを何十本も吸う求道者が住んでいた。私たちは彼が知恵の言葉を守れるように援助していたが、ある晩彼の粗末な部屋に招かれて、その努力に失敗したことを聞かされた。「できる限りの努力はしてみました。でも、止められないのです。福音は真実です。バプテスマも受けたいと思います。しかし、この悪癖だけはどうしても克服できません。」

すっかり打ちひしがれた求道者に、私たちは次のように答えた。「あきらめないで下さい。あなたは止められます。人間を超えた力が、あなたに必要な力と勇気を与えてくれるでしょう。」

そして、パウロの書簡から慰めと確信に満ちた聖句を彼に読んでもらった。「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」(1コリント10:13)

それから3人でひざまずき、彼が生活を変えるために必要な勇気と決意を得て、家族と共にバプテスマを受けられるよう、主の助けを願い求めた。この時の経験が、19歳の少年の証をどれほど強めたことであろうか。主のみたまが彼に働いて、誘惑に耐え神の戒めを守れるように力を与えて下さり、私たちは彼の人生が変わるのを目にしたのである。

あのガリラヤ人イエスは、何と力強い友であろうか。この方ほど私たちを親しく知って

おられ、私たちに対する愛を示すために多くのことをして下さった御方がいたでしょうか。また、憐れみと思いやりにあふれ、私たちの生活を変える神聖な力を持った御方がほかにいたでしょうか。それでは、最も親しい同僚として、また真の友として、私たちがさらに力を尽くして求めるべき御方はどなたであろうか。

キリストについて学ぶと、キリストとの関係をさらに深めたいと思うようになる。それによって自分自身を十分に高めていただきたい。力強い祈りと深い瞑想に時間を費やせば、私たちは礼拝する神の本質を知り、神が実に私たちの最も親しい友であることを悟ることができるであろう。

その時はじめて、キリストの友のひとりであったパウロの言葉を理解できるようになる。パウロは次のように宣言した。「わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶対的な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが……キリストとその復活の力を知り、その苦難に」(ピリピ3:8, 10)あずかれるのである。

デビッド・A・ウェトン は、イリノイ大学の組織行動学教授であり、シャンペイン・イリノイステーク部シャンペインワード部の監督である。

☆

☆

人生の仕事

もし私の頭の中にある決して揺らぐことのない、確かな事柄をひとつ挙げるとすれば、それは人生の仕事に成功すべきであるということである。そうでなければ、神がその象に形どって人を造り、その姿を与え、はかり知れない可能性を持った知性と、驚くべき特質、素晴らしい肉体の力を私たちに授けたことは全く不合理なことになり、私たちがこの人生を無為に過ごし、つまりくことを予期しながら生活を送ることになるであろう。私は、この世の中で最大の浪費は、私たちが自分の可能性のはるか下位の段階に甘んじていることであると思っている。

教会の大管長は、すべての教会員は宣教師であると言っている。しかし今日、成人の教会員の大半は自分を宣教師見込み会員位にしか考えていない。中には、伝道に出て2年間の宗教活動に邁進しているながら、帰ってくると再び以前の弱さに埋没してしまっている人もいる。

主は、この教えをあらゆる国民、種族、国語の民に伝えたいと願っておられる。しかし私たちの中にはその責任を与えられていながら、隣家の垣根を越えてメッセージを伝えることも、自分たちの住む町という限られた地域内に広めることも怠っている人が大勢いる。ホームティーチャーは教会員に福音を教えるために遣わされているはずであるが、私たちはしばしば天気や世間話にうつつをぬかし、自分たちの生活を暗闇の中に取り残している。メッセージを伝える人が霊的でなくて、霊的なメッセージを伝えることができるだろうか。メッセージを伝える人の生活が怠惰と不道德、弱点、罪、失敗の繰り返しであって、メッセージに力を加えることができるだろうか。私たちは生活のあらゆる分野で成功するように努めなければならない。

主は、私たちがこの世で成功する最大の秘訣を教えて下さった。「そもそも創世の以前より天に於て定められたる一つの変らざる律法ありて、あらゆる祝福はこれに基くなり。すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時は、この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」(教義と聖約 130:20-21) 主は私たち全員が、成功するように望んでおられる。私たちがなすべきことは、成功へ導く原則を見いだして、そこから前進することである。最後に、偉大なひとつの真理を皆さんに伝えて私の話を結びたい。この世で最も心躍る経験は、神が自らすべての時間をかけて取り組まれた人類の救いという重要な仕事に献身することである。



七十人第一定員会名誉会員
スターリング・W・シル

事実1。現在、モルモン経が翻訳、出版されているのは、世界の言語の1パーセントにも満たない。

事実2。ある推計によると、モルモン経の翻訳には4年から10年、レッスンプランと伝道用パンフレットの翻訳には約2年から3年もかかるといわれている。

事実3。モルモン経を毎年4カ国語に翻訳しても、百万人以上の人が使用する言語を網羅するだけで40年近くかかる。世界中の言語と主な方言の数は3千以上にのぼるためである。

この翻訳を短期間で行なおうとしているのが、ブリガム・ヤング大学の翻訳科学研究所である。現在、(1) コンピューターによる言語処理と翻訳補助(2) 相互作用コンピューター翻訳という2つの問題に取り組んでいる。

例えば、英語の書物をスペイン語に翻訳するには、非常に複雑な過程を踏まなければならない。まず原文をスペイン語に翻訳し、その原稿をタイプする。翻訳者がこれを校正し、

校正されたものをタイプする。さらに校閲を行なった上で再びタイプする。もう一度校閲を行なってタイプし、校正、植字、再校正を経て印刷に至る。どの段階にも誤りの生じる可能性がある。しかも多くの時間を要する。

BYUの翻訳科学研究所では、これに代わる手段を開発中である。それは言語処理と呼ばれている。すなわち、翻訳者は原文を手もたにおいて翻訳文を直接コンピューターに打ち込んでいき、鍵盤の上にある映像スクリーンを見ながら作業を進めるのである。翻訳しながら校正、訂正を行なうことができる。言葉置き換えなければ、再びタイプする必要はないので、つづりの打ち間違いがなくなる。翻訳者は追加、削除はもちろん、文字、言葉、節、文、段落、あるいは頁の変更も行なえる。

以上の作業が終ると、訳文をコンピューターのテープかディスクに記憶させる。訳文を校閲する人は、同様の端末機を使って、正しい部分には手を触れずに必要な変更を加える

翻訳を助けるコンピューター

ブリガム・ヤング大学の翻訳科学研究所では、人の関与を最小限に抑えて文書翻訳の大部分をコンピューターで行なう技術を開発している。



ことができる。コンピューターはこれを植字する。言語処理は翻訳科学研究所が開発したのではない(新聞社も使っている)。しかし、教会の翻訳部と協力して翻訳に用いたという点では最初であろう。

結果はどうであろうか。翻訳そのものにかかる時間は変わらないが、他の手順が短縮されるので、全体に要する時間はほぼ半分になる。さらにコンピューター処理は極めて迅速であり、経済的にも大幅に節約が図れる。

翻訳そのものに要する時間を短縮することは可能であろうか。可能である。現在進行中の企画の中に、瞬時参照システムと呼ばれるものがある。このシステムを使えば、これまで一々手間をかけて搜していた単語の意味や翻訳済みの聖句を、すべて一覧にしてスクリーンに映し出すことができる。

今日すでに実用化の状態にあるものとして、ほとんどの言語のアクセント表示に適用できるシステム、1万の漢字を印刷する機能、標準聖典の解析用語索引コンコーダンスの開発などが挙げられる。現在研究されている中国語の編集システムは、開発者の知る限り世界でも有数の企画である。

第二に大きな注目を集めているのは、空想科学を思わせる技術であるが、相互作用コンピューター翻訳と呼ばれている。これはコンピューターの翻訳を人が「手引き」するものである。この技術が用いられている米国唯一の機関が、BYUの翻訳科学研究所である。この研究所の画期的な働きは、国際的にも高く評価されている。従来、コンピューターによる翻訳を妨げてきた問題のひとつに、機械はあいまいな語句、口語的な表現、文法上例外的な言いまわしを処理できないということ

があった。言語学の助教授であり当研究所の所長でもあるエルドン・ライトル博士は、^{ジョン}連^{ジョン}接文法ジョンと呼ばれる言語解析のモデルを考案した。これはコンピューターに言語の諸要素の関係についての指示と、原語に相当する訳語とを記憶させるシステムで、コンピューターが原文の構造を分析し、それに相当する訳文を作成するものである。

機械の手に負えないあいまいな言いまわしに出会うと、処理作業を停止してオペレーターに質問を発する。(この段階では、原語である英語に高度に通じた人が操作する)あいまいな語句が解明されると、コンピューターはすべての処理を終えて翻訳文の作成にかかる。

次に原文と訳文がビデオ端末機に出てきて、訳語を母国語とする人がその訳文を校閲する。このように、原文の意味と訳文について最終的な決定はオペレーターである人間が下す。しかもそれぞれのオペレーターが、母国語の微妙な点について責任を持つのである。このように二重に専門知識が働くので、正確な翻訳が行なわれることになる。

この翻訳は一体どれくらい正確なのだろうか。スペリーユニバック社(コンピューターの会社)が1977年6月に出した独自の評価によれば、文法、言葉の選択、完成度合において技術的な正確度は、96パーセントであった。あらゆるシステムを導入すれば、正確度はさらに高まるであろう。翻訳科学研究所は手始めとして、英語をドイツ語、フランス語、ポルトガル語、スペイン語、中国語の5カ国語に翻訳することから始める。5カ国語の翻訳が同時にでき、しかも翻訳後の編集はずっと少なくすむので、従来5時間かかっていた行程が2時間ですむことになる。



だれよりも高く

七十人第一定会員会長
マリオン・D・ハンクス

ある日曜日の朝、特別な理由があって、私は珍しく自分のワード部に出席することができた。私たちは最後列に腰かけていたが、長身のわが家の一人息子が、監督に呼ばれ、通路を進みでて、説教壇の脇に立った。監督は息子の話をし、教会員にアロン神権の昇進

の支持を求めた。全員が支持の挙手をして、その後私は監督の指示によって、息子を聖任する特権にあずかることができたのである。

その日の昼食の時に、息子は姉たちに朝の出来事について話していた。通路を歩いて行き、監督と並んでみんなの前に立った時は怖

い気がしたという。しかし彼はこのように言った。「でもね、みんなが挙手をした時に、見たらお父さんの手が一番高く上がっていたのですっかり安心したんだよ。」その通り、息子は恐れた様子などなかった。事実私はおもいきり高く自分の手を上げていた。彼は私の息子だ。私は強くそう感じたのである。父親と息子の関係には、何か特別なものがあるようである。

私はモルモン経が大好きだ。それがいつから始まったのかよく覚えていないが、中でも特に好きなのは父親から息子に当てた指示や教えや証である。主は父親に特別な責任を与えておられる。主は私たちに、学ぶべきこと、私たちが証をすべきことを教えておられる。

イギリスの詩人、サミュエル・テイラー・コーリッジ（1772～1834）はこう述べている。ある時、彼は子供たちには神を畏れる、信心深い正しい人間になってほしいが、宗教的な教えを植えつけたり教会に連れて行ったりして、宗教に偏ることはしたくないとある農夫が話しているのを聞いた。農夫が言うには、子供が大きくなってから自分で決めればよいというのである。この農夫は立派な農場を持ち、手入れのゆき届いた庭があって、子供たちも利口だとの評判の人であった。

コーリッジはその人にこう答えた。「素晴らしいことだ！ 実に進んだ考えです。どうです、これからはお宅の畑や果樹園、庭園にその方式を取り入れられては。種播きや草取り、耕したり刈り込んだりの偏見を捨てて、好きなように育つままにさせるのです。」

神は両親に、子供を教えるという責任を授けられた。特に父親に特別な務めを課しておられる。神はモルモン経の中にその模範を示

され、かなりの部分に子供を教える父親の記録を載せられた。リーハイ、アルマ、モルモンといった人たちのことを考えてみていただきたい。

彼らは、父親という責任のもとに何を教えたであろうか。(1) 彼らは啓示された真理、永遠性の大切さ、心に訴える麗わしい神学の基本を教えた。(2) 自らの経験から有用で賢明な助言を与えた。(3) 生活、文化、文明の基盤となる価値観を教えた。(4) そして一様に、イエス・キリストと御父、さらに永遠の救いの計画について力強く証をした。

まず、模範と教えを通じて子供たちに大きな賜を残したリーハイのことを考えてみよう。

リーハイは全能者から受けた示現や警告、約束を子供たちに伝えた。これはニーファイの冒頭の記述の宣言の基盤をなすものであり、証の中心をなすものとなっていた。「さて私は今書く記録が真実であることを知っていて…私が父の言うことを何でも信ずるのは汝も知って居りたもう。」(1ニーファイ1：3，11：5)

リーハイは、特に何をニーファイに知ってほしかったであろうか。そのひとつとして、彼は息子に畑に生えている木、その木になった実、そこに通じる道、そして鉄の棒や汚れた水の淵、広々とした建物などの示現について教えた。

それが何を象徴しているかは簡単である。木は生命の木で神の愛を表わし、道は義の完成に至る道であり、川は地獄の深みであった。木になっている実は何の実よりも貴く好ましかった。広い建物は世の高慢と空しい考えを表わしていた。

この有名な示現の中で、リーハイは次の事

実を悟り、それを息子に教えた。世の中には真理を信じず、ことさらそれに反対する人々がいる。また、最も甘い実のなる木への道をたどりながら、悪魔の誘惑である暗黒の霧によって道を見失っている人々がいる。彼らは道に迷い、脇道へそれてしまう。また、鉄の棒につかまり、道を進んで木の実を食べ、その甘さを知った後から、あたりを見まわし、自分を指さしあざける人々を見て、禁制の道に迷い込み姿を消していく人々もいる。しかし、棒につかまり道を進んで木の実を食べ、神が願っておられる永遠の幸せという甘い実を家族や他人にも食べさせたいと思いつぐにあたりを捜す人々もいる。

この示現を見たリーハイは、すべてのものに反対のものがあること、この世でも永遠でも人間は自由意志によって道を選ぶこと、悪

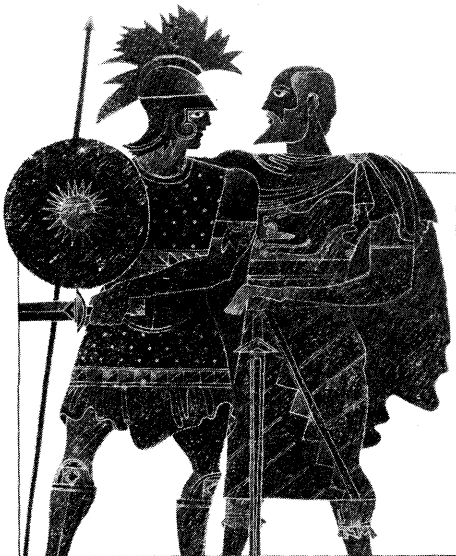
魔は実在しそれに負ける人々がいること、祝福の中でも最もすばらしい祝福は人に喜びをもたらす神のみ言葉を食し、それを人に分け与えることによってもたらされることなどを子供たちに教えた。

これらの重要な教えを、リーハイは神の啓示とみたまの力によって、詳しく子供たちに説明し、教えたのである。

私たちは予言者アルマに特別な親しみを感ずるようであるが、それは彼が自分の不完全さと悔い改めの必要なことをはっきりと告白しているからである。アルマが罪を犯したことは明白であった。彼はモーサヤの息子たちと共に教会を打ち壊そうと企て、違った道を故意に選び、人を悪へ導くことを楽しみにしていた。そのような時に、天使から教えを受けて百八十度の転換をしたのであった。天使はこう述べている。「もはや神の教会を滅ぼそうとしてはならぬ。自分がそれほど滅びなければ、せめて他人を卷添えにすることはやめよ。」(モーサヤ27：11—16参照)

それから何年か後に真正直な父親の心底からくる悲しみの声が述べられている。アルマが語ったこの言葉は、悔い改めと赦しと神の慈悲に関して、私たちが読んだり、聞いたりする中で最も意味深いものと言えるかもしれない。この偉大な教えはアルマ書39章から42章に記されている。コリアントンは伝道に召されながら、その務めを捨てて遊女イサベルについて行った。他にもコリアントンに従った者が大勢いた。そして自分の所業を次のように弁護している。「父さん、時代は変わったのです。怒らないで下さい。世の中はみんなこのようにしているのですから。」

皆さんも世の中の経験からコリアントンの



場合がまったく現代の状況と何ら変わらないことに気づかれているであろう。コリアントンの罪も遭遇した危険も事実であり、それに甘んじてしまった彼の悩みも現実のものであり、コリアントンの救いもそこにかかっていた。

そうした息子に、アルマはどう対処したであろうか。アルマは自分の過去を振り返って息子に同情的になっただろうと考える人もいるかもしれない。しかしアルマは、立場の重大さを悟らなければ望みがないことをコリアントンに理解させなければならなかった。アルマは言い換えればこのようなことを言っていた。「お前のしたことは、神の目には殺人に次ぐ行為である。お前はこの世と来たる世で受けられるはずの美しいもの、すばらしいものをすべて危うくしている。ここで、窮状に際し手を拱ねていても神は少々罰するだけで赦して下さると考えるなら大間違いである。」

自分もかつては悪事を働き、さらに今自分の息子が同じような道を歩んでいて、しかも自分のように立ち返るかどうかが危ぶまれるという苦悩を背負った父親の、それは胸を打つ光景であったに違いない。コリアントンは、しかしどうにか立ち直った。彼は言い逃れをすることをやめて、こう言った。「わかりました、お父さん。責任は自分で取ります。自分の罪を認めますし、悪かったと後悔しています。」このほかにどのようなことがあったかは書かれていない。しかしそれを心に思い計ることはできる。

アルマはイエス・キリストの贖いやその目的、意味を歓喜してコリアントンに教えている。迷わず従順な兄弟たちの模範と助言に従うように諭し、このように言うのである。「今

わが子よ。私はこれからお前がこれらのことについて心を悩まさず、ただ自分に悔い改めをさせるような心配を以て自分の罪について心を悩まして欲しい。」(アルマ42:29)このようにしてコリアントンは神の赦しを受け、自分をも赦したに違いないと思う。

最後にご紹介したい父親はモルモンである。息子に対する彼の教えは、モロナイ書の7、8、そして9章の一部に載っている2通の手紙に大まかに記録されている。モルモンは世の人の墮落について語り、「彼らは道を守らず慈悲の心のない者で」、「この国民を神に推薦できない」と述べている。(モロナイ9:20-21参照)

しかし忠実な息子を推薦し、いつの日か再び息子と再会できるようにと祈っている。私は父親たちの教えについて簡単にお話してきたが、最後にモルモンが強調した希望と、彼の証の成就について触れ、この話を終わりにしたい。

「さて私の子よ。キリストに忠誠であれ。願わくは、私が書いたことのためにお前が悲しみのあまり死ぬようなことがなくキリストがお前を慰め励ましたもうのように、またキリストの苦しみとその死と、私たちの先祖にその御姿を現わしたもうたことと、その憐みとその忍耐と、その栄光と、永遠の生命を授かる希望とは、お前がいつまでも記憶に留めておくように。」(モロナイ9:25)モルモンの最後の証は、教えと愛情、願いと信仰の証であった。モルモンもまた、息子のためにだれよりも高く手を挙げていたのである。

息子 わが友

ジェイ・M・トッド

彼と会ってから7年になるが、私は父親というものを考えるたびに、メキシコ・シティーに住むマヌエル・セルダ兄弟のことをいまだに思い出す。

セルダ兄弟と会ったのは、1972年の8月にメキシコで初の地域大会を取材した時のことである。何組かの末日聖徒の家庭を見て、福音に即した生活ぶりを見たいと申し入れていたので、通訳のジェシ・トルヒーヨ兄弟と一緒にベネメリトへ行き、成人した5人の子息を持つマリア、マヌエルのセルダ夫妻に迎えられたのであった。

自分たちがなぜ彼らの家に導かれたか、私にはそのわけがすぐにはわかった。セルダ家の物語は17年前、現在の家から200キロ余り南東にあるテワカンで、彼らの家の戸を宣教師がノックした時に始まる。半年のうちに父母と5人の子息はバプテスマを受けた。ピクトルが23歳、オーガスチンが21歳、モーセスは19歳、ラモーンが17歳、ギルベルトは16歳であった。それから1年も経たないうちに、子供たちが次々と伝道に召されるようになった。ほどなく、半年ばかり5人兄弟全員がメキシ

コの伝道部に働くという珍しい時期があった。また、これもおもしろいことだが、5人の兄弟が2、3カ月間は兄弟同士で同僚を組んで伝道をした。

子供たちが次々と伝道に出ていくようになると、マヌエル・セルダは息子たちを伝道に出し、精一杯の援助をするだけではまだ足りないと思った。そして自分が模範になろうと決心したのである。彼は妻のマリアと共に、自分たちも宣教師になろうと決意した。自分たちの周囲に、教会員でない友人、隣人、親戚はいないだろうか。

こうして、5人の子息が伝道した3年間に、マヌエル、マリア・セルダ夫妻は70人の改宗に尽力したのである。夫妻から伝道中の息子たちに宛てられた毎週の手紙には、知人が次々と教会に入る様子が記された。父、母からの真心と喜びの証は5人の息子たちの胸に燃えた。家で伝道している両親、宣教師の息子を、同僚として一緒に働く兄弟をそうして励ます両親であった。

やがてこの家族の証は、信仰と活気と愛の炎となって燃え上がった。兄弟の伝道が終つ

た時、父母に宛てられた息子たちの報告は以下の通りであった。ビクトルと同僚たちで140人の改宗者、オーガスチンは106人、モーセスは160人、ラモーンは75人、ギルベルトは233人、総計784人。私がこの家族と会った1972年にこの家族はさらに53人を教会に導いており、教会に837人の永遠の友を得たのであった。

話し終えた彼らを見ると、顔が輝いていた。私は締めくくりの質問らしきものとして、お粗末ながらスペイン語で、現在教会で何をしているか尋ねてみた。監督がふたり日曜学校会長、幹部書記、伝道部副伝道部長などであった。

私は父親であるマヌエル兄弟に向かって、何をしているかを伺った。すると副監督をしているという返事であった。兄弟のひとりから、父親が副監督をしている当の監督は彼の子供だという話を聞いた。それが、私がこれで終わりにしようと思った質問に対する答えであった。

それから、私の取材生活でも最もすばらしい場面が到来した。私は監督をしている息子、ビクトルの方を向き、「父親が副監督という心境はどんなものですか」と尋ねた。

ビクトルのその物柔らかな返事に、私は痛烈なパンチを受けたのである。「私は父を本当に愛しています。父は人生の良い助言者です。私の模範でした。靈感の源でした。人生の問題に出会った時には私を助けてくれました。父をおいて、ほかのだれに助言を頼めますか。」

私の目に涙が浮かんできた。私はおもむろにマヌエルの方を向いた。「副監督として息子さんに仕えるお気持ちはどんなものでしょう

か。」

マヌエル・セルダは、スペイン語独得の威厳ある口調でゆっくりと静かに感情を込め、震える声でこう語った。「私は息子たちを心から愛しています。息子たちに助言できるのは名誉なことです。息子の言うことに耳を傾けなさいと、人様に助言できるのもありがたいことです。『これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である。彼に聞け』と父なる神は言われましたが。そのような気持ちを感じます。父と息子の愛情というものがよくわかります。」

私は向き直ってまた子息たちを見た。「ご家族のこの愛はいったいどこから来たものでしょうか。」

すると、父マヌエル・セルダがみんなの返事をまとめてこう答えた。「私たちの家庭を変えたのは福音です。互いを永遠の友として見ることを教えてもらいました。愛についても。それに自分の子供を尊敬することも教わりました。私たちは家族の仲を裂くようなことや互いの尊敬を壊すようなこととは断固戦います。真理が我が家を変えたのです。」

さらに歓談し、心の込もった挨拶を交わして、私たちはマヌエル・セルダ兄弟の家をあとにした。しかし、以来何年経っても、私はマヌエル・セルダ兄弟を忘れたことがない。父親というものを考え、家族や家庭や、またそれが構成する社会や文化を見つめる時に、マヌエル・セルダ兄弟の面影がいつもそこにあって、私自身の立派な父親のすぐれた模範や天上の御父の教えや父親のあるべき姿を喚起させられ、それを胸に秘め、実践しようと心を新たにするのである。

質 疑 応 答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



クリフォード・J・ストラトン博士
(ネバダ大学医療科学部解剖学科助教授、
ネバダ州リーノウ北ステーク部高等評議員)

「薬用植物を用いた飲料は、知恵の言葉で禁じられている『熱き飲料』に含まれますか、それとも『懐みと感謝とを以て用うべきもの』ですか」

これはよい質問ですが、難しい質問でもあります。なぜなら、これまでに1千種類以上のものが薬草として確認されていますが、そのすべてが完全に研究し尽くされたわけではなく、そのひとつひとつの薬理作用がすべて明らかにされるまでには至っていないからです。幸いなことに、一般に広く用いられている薬草やその飲料は、これまでにほとんど分析されています。ただし、これを確認するための参考資料としてお薦めできるのは、専門

の医学書だけです。民間に伝わる知識や広告から得られる情報は、私が調査してみたところ、信頼の置けないものが多々見受けられました。

限られた誌面では、薬用植物を用いた飲料をすべて取り上げることはできませんが、その内の主だったものの幾つかについて述べてみたいと思います。

サルビアは一般にはセージとして知られ、何世紀にもわたって茶などに使用されてきました。サルビアの有効成分である黄緑色の揮発性油には、高濃度のタンニンが含まれています。中でもサルビア・リフレクサ *Salvia Reflex* は有毒です。しかし薬用サルビア *Salvia officinalis* の抽出液は、現代の気管支炎治療薬として、また咽喉炎の予防薬として大変効果があります。うがい薬として用いれば、過度の唾液分泌を抑え、優れた抗菌作用を示します。

朝鮮人参は人参茶としても知られ、報告によれば、数百万人が常用しているといえます。これには副腎を刺激して副腎皮質ホルモンの分泌を著しく促進する作用があります。つまり、炭水化物、蛋白質、脂肪の代謝を抑制し、電解質および水の平衡に影響を及ぼし、心臓、腎臓、随意筋、中枢神経組織の働きを阻害するのです。ですから、医師の指示がない限り用いるべきではありません。

ミント、スペアミント、ペパーミントなどハッカ属の茶は、胃腸内のガスを放出する作用があり、その目的で適度に用いれば安全です。タンポポ (*Taraxacum officinale*) の根は、

19世紀の医師が慢性肝臓病の治療に使用しましたが、実際の効能については立証されていません。

ムラサキウマゴヤシ（アルファルファ）には、コルチゾン生成を促進する作用がありますが、多くの人にとって皮膚炎の原因となる成分も含まれています。今日では、この植物に含まれる有害な成分を除いた合成コルチコイドが開発され、処方箋によって利用できるようになりました。そのため、旧来リュウマチや関節炎の治療薬として使われてきたムラサキウマゴヤシの需要は、著しく減少しています。

クローバー茶とサッサフロス茶とは、それぞれに有毒成分（シアン化合物とサフロール）を含んでいます。このため、合衆国ではクローバーの使用は禁止されています。

複数の薬用植物を調合した様々な茶剤が、飲料あるいは医薬品として、市販されています。それらを常用する場合は、必ず事前にその作用を確認して下さい。

マオウ属 *Ephedra* を用いた飲料は、「ディザート・ティー」「モルモン・ティー」「スクオー・ティー」「メキシカン・ティー」などと呼ばれ、合衆国西部では広く用いられています。この飲料にはビタミンCが豊富に含まれており、有害なアルカロイドは一切入っていません。もし大量に摂取すれば、心拍数が減少し、その結果、血圧を下げることになるでしょう。最近では、原因不明の咽喉痛や性病の治療にも効果があると報告されています。しかし、ここで忘れてならないのは、北アメ

リカ産のマオウと中国産の漢薬マオウを混同してはならないということです。後者には多量のエフェドリン、すなわち神経に対する刺激作用の強いアルカロイド塩が含まれています。したがって、医師の指示の下で、薬品としてのみ用いるべきものです。

このように、薬用植物を用いた飲料が「熱き飲料」か、または「慎み……を以て用うべきもの」であるかを判断するには、それが人体に及ぼす影響を考慮しなければなりません。多くの飲料に含まれている薬用成分はごく微量であり、栄養のある嗜好飲料として用いることができます。しかし、心身共に正しく栄養を摂取していれば、健康を維持するために、薬を必要とすることはありません。

諸々の草は、「慎みと感謝とを以て用うべきもの」で、軽い病にかかった「肉体を健かに」するために、主から与えられたものです。しかし主は、正しい知識に基き「人は適量にこれを用いて貪らずまたは無理に取りて用うべからず」と警告しておられます。（教義と聖約 59：17—20；89：10—11参照）

植物の薬用成分を長年研究してきた医師として、私が特に強調したいことは、あなた自身や他の人々に薬としてこれらの飲料を勧めないことです。多くのものには、未知の作用をもつ薬用成分が含まれています。民間に伝えられてきた知識はあてになりません。病気にかかって薬を必要とする場合は、医師に相談して下さい。分別のある人であれば、理由はどうあれ、いかなる薬草も多量に用いたりほしきません。

「見てごらん、この赤ちゃんめくらだよ。目がないよ。」信じられないといった表情の看護婦たちがまわりを取り囲み、新しい世界への旅を終えて誕生したばかりの紅色の膚をした赤ん坊を見つめていた。確かに、赤ん坊の目は見えなかった。目がないのである。

この世の苦難

ホーマー・G・エルズワース



看護婦をしている美しい母親と医学生の父親に知らせなければならぬが、二人はどう受け止めるであろうか。

私は医者であるが、旧約聖書の記者と同じようにこれまで何度か「神が人の子らに与えて、ほねおらせられる仕事」（伝道3:10）を見てきた。そして、神が人に与えられた艱難や苦難に、「人の子ら」がどう対処するかをこの目でつぶさに見てきたのである。確かに御父は私たちが苦難に遭遇しないことを約束しておられない。事実、神の約束はその反対であり、主は私たちに、「主は愛する者を訓練し……」（ヘブル12:6）と言っておられるほどである。聖典を研究すれば、神の友であったダビデのように、神に近い人々が大きな苦勞を負っていたことがよくわかるであろう。

ここで、その名が艱難と同意語のように言われているヨブのことを少し考えてみていただきたい。ヨブは土地を失い、富や友、息子、娘も失った。体中を腫れ物で覆われ、うじにたかれ、それでも挫けなかった。妻がこの苦悩するヨブに神を呪って死になさいと勧めても、彼は信仰をさらに堅固に持ち続けるだけであった。ヨブがこれほど深い信仰と義を示しても、神は彼を不幸から守ってはくれなかったのである。神はヨブに対して約束を与えられたが、それは私たちに對する約束でもある。つまり正しい選択をし、信仰を守り、戒めに従えば永遠の世で計り知れない祝福を受けるということである。神は苦難に遭う彼を慰め、死に至るまで忠実な彼を支え、守って下さる。この約束は、聖典に繰り返し言われていることである。

救い主は地上におられた間に、試され、耐え忍ぶことの必要性をたとえ話で教えられた。

砂の上に家を建てた人と岩の上に家を建てた人の話をし、問題が起きて、風が吹き嵐が襲ってくると片方が壊れ、もう片方が無事に残っている。両者の違いは、ヨブを支えた信仰の土台と同様、何を基とするかである。

私たちの神権時代でも、神の友予言者ジョセフは数多くの艱難に遭っておられる。リバティーの牢獄で、妻子から引き離され、何カ月も獄内に捕えられ、すべてを奪われ、食事に人肉を2度までも出されたことを思い出していただきたい。そしてついに天父にこう叫んだ。「おお神よ、汝は何所に在したもうや。神の隠家を蔽える大幕何所にありや。汝の御手はいつまで止まり……」（教義と聖約121：1—2）しかし、神はジョセフに解放してあげるとも家族のもとに帰らせるとも言われなかった。ただ予言者ジョセフ・スミスに、忘れることも見捨てることもない、「これ皆汝に善からんため、汝に経験を与えんためのものなり」（教義と聖約122：7）と約束されただけである。

御父は私たちに苦難を免れさせると約束しておられない。それはあの母と目の見えない赤ん坊も同じである。あの子は愛をもって受け入れられ、手厚い世話を受けた。両親は悲痛な問題に直面して、以前よりも情けや思いやりに長け、キリストに近い者となった。

何年か前に結婚のための健康診断に来た若い女性のことを今でもよく覚えている。彼女は生まれつき片腕がなかった。彼女のカルテの職業欄に速記者と記入してあるのを見て、私は尋ねた。「秘書をしておいでですか。」

「驚かれましたか」と、彼女は返事の代わりにくすくす笑い出した。「片腕でも皆さんと同じようにタイプできますの。物心ついたと

きから、母は私に障害を授かったのは私が強くなるためであって、片腕でも両腕がある方たちと同じようにいろんなことができなくちゃいけないと教えてくれました。自分のハンディを本当の障害だと思ったことはまだ一度もないのです。」以来、私はこの女性をずっと診察し続けてきた。彼女はそれから心臓の手術を受け、子供を産み、愛をもって子供を育てておられる。艱難を立派に克服している彼女を見て、神は必ず喜んでおられると思う。

ここで対照的な二つの例をご紹介します。ひとりは36歳の女性で、名前を仮にメアリーと呼ぼう。彼女に手術をした時、癌はすでに腹部全体に広がっていた。翌朝回診すると、彼女は真剣な面持ちで「癌でしたのでしょうか」と私に聞いた。私はためらいがちに、「はい、そうでした」と返事した。彼女が次に「どれだけ生きられますか」と聞いてきた。私は、正確な時期はわからないと説明した。彼女は自分の質問を誤解しないでほしいと言い、死ぬのが怖いのではないと言った。

メアリーは成人アロン神権者のための学習コースをちょうど終えたばかりで、特に天父を近くに感じていた。「神殿に備える」という学習コースであった。メアリーは自分の夫のことや、家族3人で「神殿に備える」のクラスに出席するようになって、教会に活発になった十代の娘さんの話をしてくれた。コースの終りに監督から、なすべきことを確実に実行するなら半年以内に神殿に行くことができると約束されたという。メアリーの願いは、その半年間でも生き永らえて、神殿に行き家族の結び固めを受けたいというのであった。「半年だけでいいから、生きていられれば、満足して死ぬことができます」と彼女は言っ

た。メアリーはその半年を生き永らえることができた。彼女は入院末期の間、普通であれば痛みがひどく、大量の麻酔剤が必要なはずなのに、全身を冒されながらも、いつも苦痛がないかのように明るかった。メアリーには痛み止めの薬は必要でなかった。彼女は両腕を組んで、静かに息を引き取ったのである。

主は、教義と聖約42章で次のような言葉を述べておられる。「およそ、われにありて死ぬる者は死を味わうことなし。そは死は彼らにとりて甘ければなり。」(教義と聖約42:46) 死を甘くするのは、その人の天父に対する信仰であり、信頼であり、天父を近くに感じる気持ちである。

メアリーを診察していた同じ頃に、もうひとりの患者がいた。仮に彼女をジェーンと呼ぼう。42歳であった。彼女はメアリーと同じく治癒できない癌であった。彼女は自分が不治の病と知った後、家を出てホテルに移り、福音の教えと正反対の生活をした。バーをはじめ、酒をあおり、麻薬に手を出した。彼女自身の言葉を借りれば、「死ぬ前に何でも経験する」というのだった。彼女は神を呪いながらわめき苦しんで死んだ。

教義と聖約42章にはこのようにも書かれている。「われにあらずして死ぬる者は禍なるかな。そは、死は彼らにとりて苦ければなり。」(教義と聖約42:47) 死を苦くするのは、天父に対するその人の不信仰と戒めを守らないことである。

このように同じ問題を持つふたりに、このような違いが表われてくる。前者は謙遜さ、愛や善なるもの、美しいものに対する理解を深めるために、人に試練が必要なことをよく知っていた。後者は、それを理解せず、天父

から遠ざかって自分の荷や悲しみをさらに深くしたのである。

主が私たちをこの地上に置かれたのは、試しを与え、問題を課し、それによって知恵を深め自己を鍛練するためであった。困難を立派に克服してゆくことは、永遠である自分の人格や精神の成長にほかならない。そして私たちが円熟し、賢くなるにつれて、ますます神の摂理を完うできるようになるのである。もしすべての人が障害も回り道もない気ままな人生を歩むとしたら、何という浅薄な虚弱者に成り果てることであろう。ダビデは、神は民に求めるものを与えられたが、彼らをやせ衰えさせられたと語っている。(詩篇106:15 参照) 私たちは天父の聖なるみ前に住み、永遠の生命を得て主に仕えるべく義人となるために、自分なりに可能な限り善い人間になりたいと決意してこの地上にいる。私たちは人生で重大な問題に出会う時、内面の自己を探り、この立場にあってイエスなら何をされるかと考え、たとえ一時期支払う代価が高かろうとそれを実行するのが賢明である。

私たちは「やせ衰えた心」で御父のみもとに帰りたくはない。問題に見舞われた時には、ひざまずき、それを取り去ってもらうことよりも、解決し、克服する力、耐える力を求めて神に祈ろうではないか。確かに神は良き目的を持って、人の子らに骨をおらせられる仕事を与えられるのである。

☆

☆



ちい とも 小さなお友だちへ



てん とく ほう こく 天のお父さまへの報告



N・エルドン・タナー

ある日、かんとくをしている父が、わたしと弟に用事を言いつけて、教会へ出かけて行きました。とうぶん帰らないだろうと思っておりましたが、すぐもどって来て、子牛にのって遊んでいるわたしたちに言いました。

「おとうさんは、おまえたちを信頼していたんだよ。」

わたしは、このできごとから大切なおしを学び、もう二度と人をうらぎらないようにしようと決心しました。


家族の祈りで、父が主と話したことを思い出します。いっしょにひざまずいて、その日あったことを主にお話するので。悪かったことや失敗した

ことも全部話します。

「今日、エルドンは、なすべきことをしませんでした。どうぞおゆるし下さい。天のお父さま、エルドンはこれからよいことをするように努力しますので、どうか、良い子になれるよう助けて下さい。」

朝には、「正しい行ないをして、天のお父さまにより報告ができるように導いて下さい」と祈りました。

主に報告することを思うと、その日一日よい行ないをしなければという気もちになりました。祈ることと、信頼される人になることを教えてくれた父に、感謝しています。



クレイグは、自転車にのれることが
じまんでした。毎朝、自転車で、
近くのグリーンさんの家へ行きます。
クレイグの家は、お父さんがいないの
で、お母さんが働いています。それで、
ようち園に行くまでグリーンさんの家
で遊んでいるのです。

ある朝、起きてまどの外を見ると、
外はいつもより暗く見えました。

「きょうは、とてもきりが深いわね。
今朝は、グリーンさんの家まで車で送
ってあげましょうね」と、お母さんが
言いました。

「だいしょうぶだよ。それは、きり
の中を走るって、きっと楽しいよ。」

クレイグがあまり言うので、お母さん
は言いました。「じゃあ、やくそくし
てちょうだい。ライトをつけて、歩道
を走るって。道をわたるときは、とく
に気をつけるのよ。」

クレイグは、急いで着がえて朝こは

クレイグの 見つけを 信 仰

ルイス・スプラント

んをすませました。そして、セーターを着るといちもくさんにガレージへ走ってゆきました。

きりの中は、まるでおとぎの国へ来たようです。と、急にクレイグは何かにつまずいてしまいました。きりが深くて、セメントのひびわれに気がつかなかったのです。

「前の車りんも見えないや」クレイグはつぶやきました。

自転車にとり乗って、歩道の上をゆっくりとこぎ始めると、なんだかわくわくしてきました。クレイグは、お母さんの言いつけを守って歩道を走り、注意して道をわたりました。いつもの角を曲がったつもりでしたが、そのうちに見なれない道に出てしまいました。きりは、どんどん深くなるようです。クレイグはだんだん心細くなってきました。

自転車をおりましたが、どうしたらよいのかわかりません。あたりはひんやりとしています。ここはどこなのでしょう。大つぶのなみだがほほをつたいました。その時、お祈りのことを思い出しました。「どうしてよいかわからない時は、信仰をもって祈りなさい。」だれかがこんなことを言っていました。

信仰があるかどうかわかりませんが、クレイグはお祈りのし方を知っていました。自転車のそばにひざまずくと、グリーンさんの家へ行けるようにお祈りしました。「アーメン」と言っただち上がると、きりが少しはれたような気がしました。でも、道はまだはっきりと見えません。

その時です。明るいヘッドライトを照らした車が角に止まりました。まだからだれかが顔を出しました。「まよってしまったのかい、クレイグ。さあ、のりなさい。」

それは、ジェームズかんとくの声でした。クレイグは、やっと安心しました。かんとくは、自転車も車に入れてくれました。

車の中で、クレイグは、祈りがかなえられたことをじっと考えていました。とつぜんかんとくの方を向くと、クレイグは言いました、「かんとくさん、信仰があるってどうしてわかるの。」

「そうだね、クレイグ。信仰というのは、神様が生きておられることを知って、神様を信じることなんだよ。」

平安で、あたたかな気持ちでクレイグをつつみました。「かんとくさん、ありがとう。ほんとうにありがとう。」

タッドは、はり金のかきねの間を、くぐりぬけました。コリー犬のキングも、いっしょにかきねを、とびこえました。4月の太陽は、キングの金色の毛なみを、かがやかせています。

「さあ、キング、おいで。」タッドは、そばよせて日ざしであたたまったその頭をなでてやりました。キングは、フィリップおじいさんをのぞいて、たったひとりの親友なのです。学校まで16キロもある、この山の小さな町には、同じ年ごろの子どもは、だれもいません。

タッドは、べつのさくをとびこえてフィリップおじいさんのひつじのかこいへ、入りました。ひつじ小屋にはフィリップおじいさんがいます。「おじいさん」そうって、うす暗い小屋の中へ、入っていきました。すると、おじいさんはうまれたばかりの子ひつじを、見ているところでした。タッドは、にっこりしました。

「あとで、さわらせてあげよう。」そうって、おじいさんは2本のシャベルをとりあげました。「気持ちのいい仕事じゃないけど、いっしょにおいで」と言うと、フィリップおじいさんは、出てゆきました。

タッドは、じっと戸口でまっていたキングをつれて、明るい日ざしの中を

かけ出しました。ほとんど土よう日は、フィリップおじいさんと、ひつじのせわをしてすごします。タッドは、フィリップおじいさんがだいすきです。いっしょにいと、ほんとうのおじいさ

ふたりの 友だち

クラウディア・レミングトン



んのような気がしてきます。

「ぼくたち、きょうはなにををするの。」
やっとおじいさんにおいついて、たずねました。「すぐに、わかるよ。」

ふたりがまきばのはずれに来ると、黒と白のカササギが、なんか、空ひくくとんでいました。見ると、地面に2ひきのひつじが死んでいます。「どうしたの。」おじいさんは、さっそく、あなをほりはじめました。「犬どもが、ころしたんだ。」タッドは、きずついたひつじを見て、胸がしめつけられました。

タッドには、わけがわかりませんでした。「いつ、犬が来たの。見たの。」

「新しいダムの工事がはじまった時、人が4、5ひきの犬をつれてきたんだよ。どうもうな番犬なんだ。」

「今までに、10ひきか12ひきのひつじをころされたよ」と、おじいさんはいいました。いかりといきどおりをこめて、タッドは「どうして、かい主にいわないの。」と、さげました。

「いってみたよ。だが、どの犬も夜は、つないであるとか何とかいって、ころしていない理由をいうんだよ。わしも見たわけではないし、はっきりしたことはいえないんじゃないよ。」

「それじゃ、一晩中、てっぽうをもって、見はったらどうなの。犬がやって来たら、うてばいいじゃない。」

「同じことを考えたよ。わしの土地に、あやしい犬が入って来たら、うてもいい権利はあるんだから。」

タッドは、死んだひつじをうめる手つだいをしました。ふたりは、まきばをとぼとぼと横ぎり、小屋へもどりました。キングもしずかに、ふたりのあとからついてきました。

次の朝、日よう学校へ行く前に、タッドは犬がつかまったかどうかきこうと、おじいさんのところへ行きました。ドアをそっとしめて、しずかに口ぶえをふいて、キングをよびました。けれども、キングは出てきません。ちよっとへんに思いましたが、またずに走り出しました。さくの一ばん下をはい出ると、フィリップおじさんがうずくまってい





るのが見えました。犬をうったんだ、
そう思^おって、走^はってゆきました。けれど、
すぐに立ちどまりました。おそれと悲しみに、
体^{からだ}がうごかなくなりました。ゆっくり足^{あし}をはこぶタッドの目^めに、
雨^{あめ}にぬれた金色^{こがねいろ}の毛^けなみがうつりました。その目^めでタッドは、おじいさんを見上げました。フィリップおじいさんは、タッドの肩^{かた}に手^てをおき、「キングだった。すまなかった」と、つぶやきました。その顔^{かお}は、なみだと雨^{あめ}にぬれていました。黒いひとみは、とてもかなしそうでした。

タッドは、ぼうぜんとしていましたが、やっ^{くち}と口^{くち}をひらきました。「何^{なに}がおこったの。」

「雲^{くも}のあつい、まっ暗^{くら}な夜^{よる}だったんじゃない。つい、ねむってしまって、目^めをさますと、まきばで犬^{いぬ}がうごくのが見えた。そこで、その犬^{いぬ}をうったんじゃないが、キングとは知ら^しなかった。きっとえさを食^たべにゆくところだったんだろう。」フィリップおじいさんは、タッドにうでをまわしました。

「どうしてキングをうったの。キングを知^しってるじゃない。毎日^{まいにち}、見^みてるじゃない。」おじいさんのうでをふりほどきました。声^{こえ}はいかりで高^{たか}くなっていました。

ぬれたキングの体^{からだ}をはこぶのは、タッドひとりでは、とてもむりでした。ふたりに荷車^{にくま}にのせ、おじいさんがタッドの家^{いえ}まではこびました。キングのために、タッドはやわらかな土^{つち}にあなをほりました。フィリップおじいさんは、しずかに、そのようすをみていました。

月^{げつ}よう日^びの夜^{よる}、フィリップおじいさんは、子^こひつじをもつたずねてきました。タッドは、おじいさんにもあわず、子^こひつじもうけとりませんでした。その一週間^{しゅうかん}は、ほとんど、学校^{がっこう}からかえると、へやにとじこもっていました。夕食^{ゆうじき}がすみ、ようじがすむと、すぐにへやに行^いきました。金^{きん}よう日^びの夜^{よる}、お父^{とう}さんは、タッドのへやにきて、ベッド

のそばにすわりました。それでもタッドはなにもいいません。

しばらくすると、タッドは口をひらきました。「お父さん、犬の天国って、ほんとうにあるの。」

「犬の天国は、しらないけれど、すべてのものの命は、永遠につづくことはたしかだよ。すべてのものは、肉體として造られる前に、靈として創造されたからね。」

「それは、どういうことなの。」

「むずかしいと思うが、キングは今も、生きているということなんだよ。」

「ぼくが死んだら、また会えるの。」

「はっきりとはわからないが、会えると思うよ。」そういうと、お父さんはタッドのそばにきて、こういいました。

「お父さんにはどうもわからないことがあるんだよ。このさびしいところで、おまえはふたりのすばらしい友だちをもっていたね。ひとりは、事故でうしななった。これはどうすることもできなかった。でも、どうしてもうひとりをうしなおうとするんだい。フィリップおじいさんが、どんな気持ちですごしているか、考えたことがあるかい。」

タッドは、今までおじいさんのことは考えようともしませんでした。でも、おじいさんのなみだと雨でぬれた顔はいつも心のどこかにこびりついていま

した。考えてみれば、犬をうつことは自分がいいだしたのです。「だってぼく、子ひつじなんて、ほしくなかったんだもの。キングのかわりになんて、ならないよ。」

「かわりじゃないよ。おじいさんは、ただ、おまえに、すまない気持ちをつたえたかったんだよ。おまえより、フィリップさんのほうが、どんなにきずついたか知れないよ。」

タッドは、そのことばに、はっとしました。

土よう日の朝早く目をさますと、その日も、おなかがいたみました。キングが死んでからずっとつづいているのです。太陽の光が、まどにさしこんでいます。タッドはきがえて、ゆっくり、まきばへ向かいました。朝つゆは、運動ぐつをぬらしました。太陽が顔をてらすと、少しずつタッドはげんきになってきました。

フィリップおじいさんは、小屋でひつじの毛をかる道具をそろえていました。「ぼくに、あのひつじをください。」おじいさんはふりむきました。

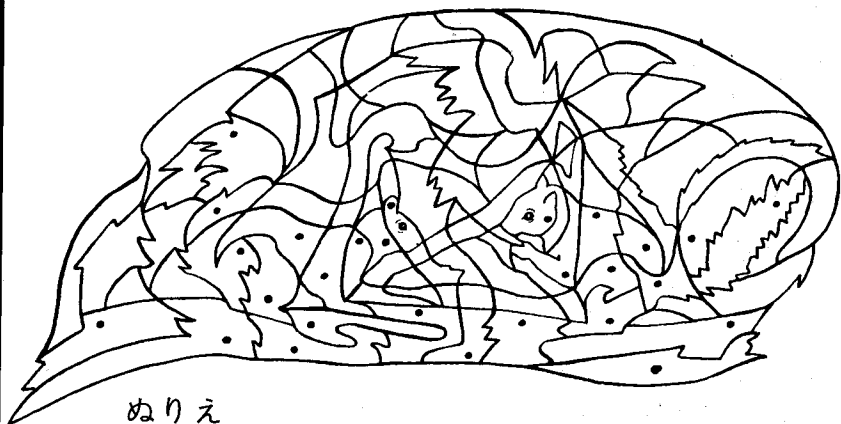
「タッド、来てくれてうれしいよ。」フィリップおじいさんの目は、かがやいていました。



くまばちハッチのパズル

おもちゃばこ

さて、ハッチが、すの
そとへでるには、どのみ
ちをとればよいでしょ
うか。

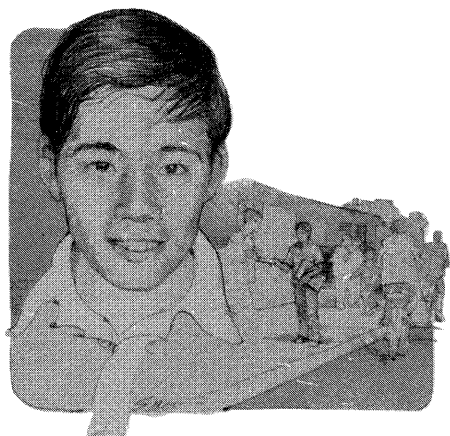


ぬりえ

てんのあるばしょを、ぬりつぶすとかわいいどうぶつが
あらわれます。

人のために

スコット・スノー



韓国の16歳になるキム・タエ・ワン兄弟は、世界中のセミナー生徒と同じように、ルカ伝10章の良きサマリア人のたとえ話をすでに勉強していた。

彼はある朝母親に頼んだ。「お母さん、今日はもうひとり分お弁当作ってくれない？」キム姉妹は、成長が盛んで食欲が増したのだろうと考え、もうひとつ弁当を作った。それから毎日、彼女はふたり分の弁当作りに励んだ。

ある日、父親のキム博士のところへ、親しい友人から電話がかかってきた。

「お久しぶりです、キム博士。ご家族お変わりありませんか。」

「はい、みんな元気しております。」キム博士は快活に答えた。

ふたりはあれこれ話をしたが、やがて友人のリー氏がだしぬけに言った。「いや、最近ですが、ご家族、本当にお変わりないのですね。」

キム博士は一瞬戸惑い、いぶかしげに言った。「どうしてでしょう。何かありましたか」

「実は、お宅のタエ・ワン君が先日街角で新聞売りをしているのを見かけたのですから。」

「えっ、何ですって。本当ですか。」

「確かです。それでご家族のことが気になって、一度伺ってみたいと思ったわけです。」

その午後、キム博士は部屋に引きこもり、タエ・ワンがだれにもひとと言も言わずにそのようなことをしているのはどうしたわけかと思案した。彼はその日の夕食後に、息子と話し合う時間を取りたいと思った。そして「タエ・ワン、ちょっと話したいけどいいかな」とようやく切り出した。

「いいよ、お父さん。」

「今日、リーさんから電話があったんだ。先日、君が街で新聞を売っていたのを見たそうだが、それ、本当かい？」

タエ・ワンはおずおずと答えた。「はい、でもクラスの友達のためだったの。お弁当を持って来ないから、ぼく、もうひとつのをあげているし。新聞一部売ると40ウォン(約20円)になるんだよ。」

「そうか、どうしてそんなことをしているんだい。まず父さんに言えばよかったのに。」

「だって、ぼく、友達のために何かするとき、良きサマリア人のようになれる気がするんだ。それに、ぼく、恵まれてない友達の役に立ちたいんだ。ぼくのしていること、たいしたことじゃないでしょ。セミナーのテキストを読んで、こういうことをしなくちゃいけないと思ったの。」

『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。』

『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』……(ルカ10:27) タエ・ワンは、救い主のこの戒めの意味を知っている。

最近、インドネシアの伝道部を訪問し、ジャワ島の宣教師や会員たちと会った。その後私はシンガポール行き早朝便に乗るため、朝の6時にチェックアウトしてホテルを出た。私は玄関に止っていたタクシーに駆け込むように乗ると、国際空港に行くようにと言った。ところがどうしたことだろうか、車のエンジンがかからない。バッテリーが上がっていたのである。

さてこのような場合、皆さんならどうするだろうか。

私は頭の中で素早く考えた。荷物を降ろして別のタクシーを捜したのでは時間がかかるだろう。それに、客を失ってしまえば、この

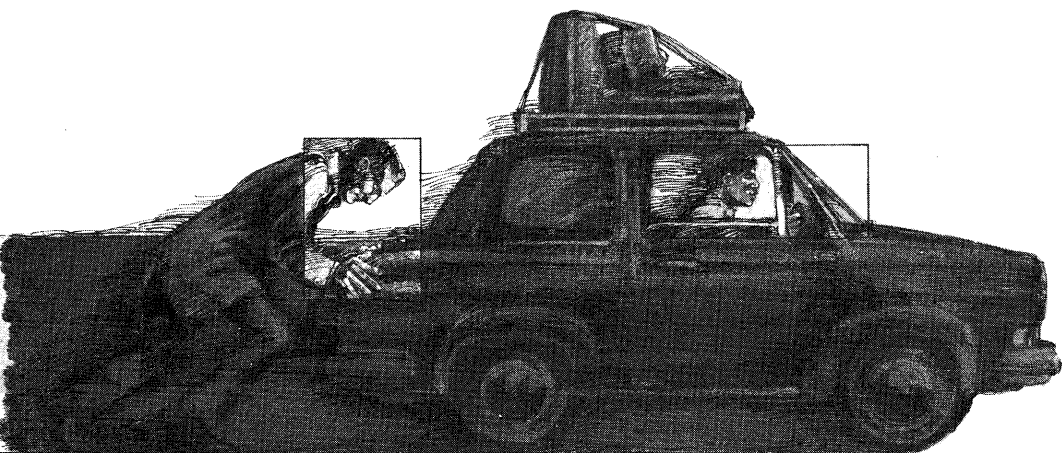
運転手はがっかりするだろうし。

私はタクシーを押して朝の運動をすることにした。そこでインドネシア人の運転手を車内に残して、車の後ろに回った。ところがこの運転手が、後押しをするオランダ人の力を過大評価して、十分なスピードが出ないうちにクラッチを入れてしまったからたまらない。車はガクンと言って止まってしまった。私たちはもう一度試みた。今度は運よくエンジンがかかり、タクシーは大きな音をたてて動き始めた。私は勢いよくドアを開けると、車に飛び乗って空港に向かった。

それから1時間半後、私は飛行機に乗っていた。入口で私を出迎えたスチュワーデスは

タクシーを押した日

七十人第一定員会会員
ジェイコブ・ディエガー



こう言った。「ここでお客様にお会いできるとは思いませんでした。お客様は、今朝ボロブドール・ホテルの前でタクシーを押しにいらした方でしょう。」

彼女の話によると、乗務員全員がホテルの横に駐車してあった空港のリムジンバスから、その光景を見ていたそうである。そして空港に向かう途中、何度もそのことが話題にのぼり、みんな不思議に思っていたそうである。「いったいどういう人なのかしら。ボロブドール・ホテルに泊まるほどのお金があるのに、なぜ朝の6時からタクシーなんか押ししているのかしら……」

これは伝道のチャンスだと思った私は、紙入れから名刺を取り出して言った。「私たち末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は、人との触れ合いを大切にします。」

そのスチュワーデスは正規の乗務員ではなく、キャセイ航空の機内サービス指導員であり、香港にある乗務員訓練所で教えた生徒たちの仕事振りを視察するために、乗り込んでいるということであった。それを聞いて、教会を紹介する別の方法がひらめいた。「末日聖徒イエス・キリスト教会は、世界最大の教育機関を持っています。少なくとも200万人の教会員が、靈感により与えられた資料に基づいて、毎週教育を受けます。」さらに、私が自分の時間の大半を使い東南アジア9カ所にある伝道部を回って宣教師や教会員を教えていることも説明した。

すると彼女はこう言った。「私たちが捜していたのは、お客様のような方かもしれません。飛行機旅行に通じた方で、どのようにすれば、乗客に親しく応対することができるか教えて下さる方を捜していたのです。」そこで私は、

教会の責任に支障を来さない日であれば、無料で香港の入門コースや補習コースで喜んでお手伝いしますよ、と答えておいた。

私は心の中で「何が末日聖徒をこのようにさせるのか教える絶好の機会だ」と考えていた。

香港に戻るとさっそく、航空会社の訓練部長から連絡があった。すでにあの指導員から報告が入っていたのである。私は約束をとって、彼の事務所を訪ね、2時間ほど話し合った。部長は教会の事業や業績に深い感銘を受けたようであった。

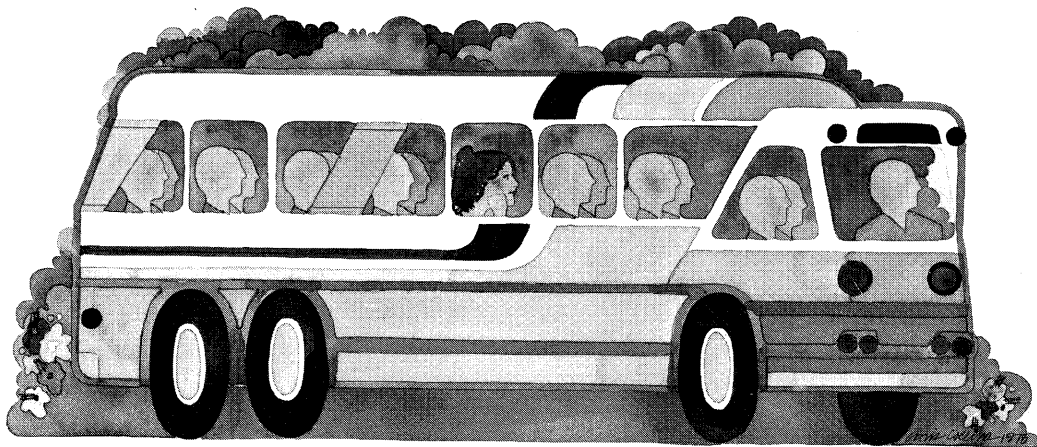
インドネシアのジャカルタで、あの朝人々の目に触れた一教会員の姿から、将来非常に多くの人々にこの福音を伝える機会が訪れることを信じている。

私たちは皆伝道する機会を与えられている。人々は私たちの行ないを見ている。問題は、正しい時と場所を見計らって正しいアプローチをすることである。

もう一度次の聖句を思い出していただきたい。「真理のある所を知らざるが故にただ真理に遠ざかる者……多ければなり。」(教義と聖約123:12)

この教会は、過去も現在も、そしてこれから先も常に伝道する教会である。伝道活動は宣教師だけの責任であると考えずに、あらゆる機会をとらえて隣人に福音を宣べ伝えていただきたい。

福音は真実である。イエスはキリストである。主の教会は予言者ジョセフ・スミスを通して回復された。私たちは、有効なあらゆる手段を活用してこの輝かしいメッセージを人々と分かち合おうではないか。



待合所でバスを待っていた時間があまり長かったので、私は列が動き出し、バスに乗れるようになった時にはほっとしました。ちょうど列から空席がふたつ見えたので、私たちは、ユタ州のシダー・シティからソルトレーク・シティまでの道のりを、夫婦でゆったりと座って行けるものと思っていました。弟が伝道に出るので、その前に会おうと思って出かけてきたのです。

ところが通路を進んで行ってみると、そこには私たちの前に並んでいた女性が座っていました。しかたなく、私たちは荷物を網だなに載せている乗客の間をかきわけて奥へ進んでいきました。そこから2、3列後の窓際の席に夫が座りました。夫は大学の勉強から一時的に解放された気分で、「ベン・ハー」の小説を取り出し、足をつっかい棒にして体を思い切り伸ばして、本が読み易い姿勢を取りました。他方、私は隣の通路側の席に掛けて、あたりを見わたしました。

私たちの前にふたりの女の子が座っていて、そのひとつ前の席には彼女たちの弟とお母さんが座っているようでした。

「彼らはきっとモルモンの家族に違いない。」私はそう思いました。私は生まれ故郷のネバ

ダ州レノ市を発った時から、ユタ州の人は皆末日聖徒か、そうでなくても教会のことをよく知っている人たちだという思いをいつも抱いていました。ところが、先日開かれたステーク部大会でその考えを打ち消すような話を聞かされたのです。そのステーク部大会のテーマは伝道でしたが、その中である人が、福音を聞くために導かれてユタ州へ来る人が大勢いるという話をしていました。またある人は末日聖徒が比較的によく住みついている社会の中にも、だれかが彼らに真理を紹介するだろうと思って何もしないために教会のことを知らない人が大勢いると指摘していました。

私は弟がスイスで伝道するようになってから、特に伝道について深く考えるようになっていました。その上大会での話を聴いて、隣人に証を述べる責任をますます痛切に感じていました。今度の旅行でも、荷物を詰めながらモルモン経と一緒に持って行きたいという衝動に駆られたのですが、何とかそれを抑えてきたのでした。

私は、姿勢を少し変えて通路の反対側を見ました。兄妹だと思うのですが、男の子と女の子が窓側の席の奪い合いをしています。その後ろの席では、お母さんがふたつの席にど

知らない人ばかりの バスで

エリス・リチンス

っかと腰をおろして眠りかけています。

「いよいよ、長旅だわ。」私は独り言を言いながら、いちいち周囲のことを気にしても始まらないと思い直して持ってきた雑誌を取り出しました。その本の中に旅行の時に必ず大勢の人々と話をして、友達になっていく人のことが書かれていました。友情はすぐ隣の席に座っている人から始まるとも書かれていました。私の良心は痛み始めました。恐らくバスの乗客の大半の人も私と同じように友達になりたいと思っているのかもしれませんが。しかし、恥ずかしくて自分から話しかけられないのです。それなら私から話しかけなくてはいけないと思いました。私は勇気を奮い起こしました。そして先週の扶助協会でフェローシップングについて勉強したことを断片的に思い出して気を強くしました。

バスの中は全くの知らない人ばかりなので心配なことは心配でした。幸い私は長年子供相手の仕事をしていましたので、まず通路の向こう側で退屈しているふたりの子供と友達になれるのではないかと思いました。運よくバッグの中に糸があったのでそれを切って結び、私の席と、男の子の席の間の通路に身を乗り出しました。男の子が通路側にいたのは

席の奪い合いに負けたからだと思います。私は糸を目の前に出して、指でいろいろな形を作りながら、あや取りを知っているかと尋ねました。男の子はあまり知らないようでしたが、退屈しのぎになるのがうれしかったらしく、私たちはすぐにあや取りに夢中になりました。

ところが難しい形になってくると、私もわからないことがしばしばありました。すると私の前にいた女の子が助け船を出してくれ、さらに妹までも身を乗り出してきました。男の子の妹も、最初は興味がなさそうにしていたのですが、いつの間にか私たちのすることじっと見入っていました。

そのうち、私たちはいつの間にか自己紹介をし合うようになりました。ジャネット（あとで末日聖徒だということを知ったのです）が非教会員のジョンに別のあや取りを教えていたので、私は彼らにも糸を切って渡しました。おしゃべりをしたり、遊んだり、私たちはもう他人ではなく友達でした。ジョンは、妹のエイプリルとラスベガスからニューヨークの親戚のところへ行くところだと教えてくれました。

あや取りに飽きてくると、「私は何という動物でしょう」というゲームをすることにしました。最初に私が何かの動物を頭の中で考え、みんなが「はい」「いいえ」で答えられる質問をして、その動物を当てるのです。スザンヌが正解を出したので次はスザンヌの番です。カンガルーというのが正解でした。彼女は、お兄さんがオーストラリアへ伝道に行く召しを受けたばかりなのでカンガルーを選んだと説明してくれました。

「スザンヌも私と同じことを考えているんだわ」と、私は心で叫びました。味方がいたのです。私のほかに、伝道の精神でフェローシップを心がけ、私よりも先に実践している人がいたのです。もしかしたら、彼女は私が非教会員だと思って、福音に興味を持たせようとしたのかもしれませんが。私は、自分の

弟もすぐに伝道に出る予定だと話しました。ジョンは伝道というのが何だかわからない様子でしたが、とにかく次は彼が何か動物の名前を考える番です。ゲームが再び始められました。

「あーあ、また絶好の機会を逃してしまいました。」私は心の中でつぶやきました。しかし5時間の旅だから、またチャンスが巡ってくるだろうと気を取り戻しました。そして、もう少し自分から友達になるべきだと思ったのです。それから数分も経たないうちに、私たちの遊びがあまりににぎやかなものですから、バスの中の他の人たちも注目し始めました。前の席に座っている男の人までも振り向いて、バスの後方でにぎやかに楽しんでいる私たちを見てにこにこしていました。

非教会員のジョンとエイプリル、そして彼らのお母さんの3人は、ゲームがほんとに楽しそうでした。わかりにくい動物を選ぼうと懸命になっているふたりの子供の様子をお母さんは時折シートの上から見て笑っていました。ゲームはなかなか終わりそうもありません。そしてジャネットとスザンヌの弟のラルフまでも可愛いことを言ってみんなを笑わせるのです。

再びエイプリルに順番が回ってきました。今度はコアラの名前が出て、再びオーストラリアの話になりました。「チャンスだわ。」心の中でささやく声がありました。みんなもこのゲームに少し飽き始めていたので、ちょうど良い機会のように思われました。さあ、スザンヌ話してちょうだい。私は心の中でそう叫んでいました。スザンヌはこれまで何度もやってきたのだから、今度は私が友達に福音を紹介する番だと重々承知しているにもかかわらず、そう言っていたのです。

「私にはできない。みんなが聞いている。」何かを言い出そうとするのですが、思いが定まりません。しかし、しばらくしてこう思うようになりました。「とってもいい機会じゃないの。私が切り出せば、きっとスザンヌも助

けてくれるわ。いえ、それよりも夫は帰還宣教師だから、立ち上がって堂々と説教をしてくれるかもしれない。そして、お客さんたちはみんな、自分の町へ帰ったらすぐにでも宣教師のレッスンを受けに行くかもしれない。」

私は何とか勇気を振りしぼって話し始めました。ジョンとエイプリルはニューヨークへ行くところでしたので、クモラの丘を見たことがあるか尋ねました。聞いたこともないという返事でした。「それなら、フィリップ」と思って夫を見ましたが、夫からは何の助けも返ってきません。ただ本を読みふけているだけです。スザンヌも何も言ってくれません。自分で何とかするしかありませんでした。

私はモロナイとジョセフ・スミスのお話をしました。持っていた聖典を見せて、モルモン経という題字を読んでもらいました。それからモルモンがどういう人かを話をし、なぜ人人から「モルモン」と呼ばれるかについて少し話をしました。それから、ジョセフ・スミスの話をしました。それはちょうど昔教えていた時に子供たちにお話をしたのと同じで、思ったよりずっと簡単でした。バスの乗客たち、特にジョンとエイプリルのお母さんが話に耳を傾けて下さっていました。話が終わるとジョンがこう尋ねました。「でも、どうしてそれが本当だとわかるの？」私は待っていましたとばかり、ジョセフ・スミスと同じように天のお父様に尋ねてみればわかるかと答えました。私たちはそれから、祈りについて少し話し合いました。夫を見ると、夫は私ににこっとほほえみかけました。私のしていることを始めから終わりまでずっと見ていたのです。

何もかもうまくいったようです。バスがブロボに入った時には神殿を教えてあげました。スザンヌはソルトレーク・シティーに入ったからソルトレーク神殿とモロナイの像を見せてあげると約束しました。(私たち夫婦はその前の停留所で降りることになっていたからです。) 私たちも興奮気味でしたが、彼らもすっかり興味をそそられた様子でした。

バスはプロポで10分間休憩しました。私は心の中で、「どうか、モルモン経が手に入りますように」とお祈りしました。そして席を立ち、急いでバスから降りて本を売っている所を捜しました。しかし、書店は一軒もありませんでした。ところが、店先の状差しにだれかが置いて行った、古びたモルモン経が一冊入っていました。少し端がめくれてはいますが、私が家に置いてきたのと同じ明るい青色のモルモン経です。私が店員にそれを売って下さいとお願いすると、店員はその本をただで譲ってくれ、跳ぶようにしてバスに乗り込む私をじっと不思議そうに見ていました。

私はその大切な本の内側に、新しい友人たちに贈る短い文を書きました。それにジャネットとスザンヌと私がサインをして住所を書き込みました。5歳のラルフも、自分は大きくなったら伝道に出るのだと言ってサインをしました。そのプレゼントをみんなで箱に入れて包み、私のバッグの中にあったカラーペンで絵を描きました。

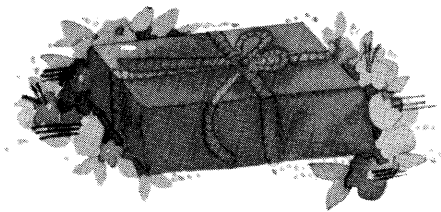
プレゼントの用意はこっそり、すばやくするつもりでしたが、停車時間が終わってジョンとエイプリルがお母さんと一緒にバスに戻って来た時には、まだ包み始めたばかりでした。子供たちはさっそく何だろうかと寄ってきましたが、お姉さんたちがだれかにすてきなプレゼントを用意しているのよとだけ答えておきました。彼らは自分たちの席に戻りましたが、はっきりと教えてもらえなかったのが、ちょっぴり不満だったようです。そこで

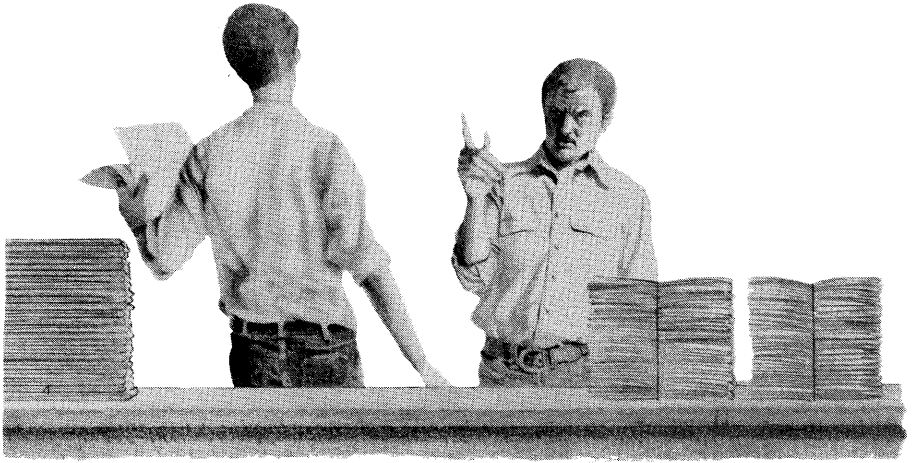
私は、子供たちに話しかけ、お姉さんたちが今包んでいるけど、あなたたちだったら、どんな色が好きですか、と尋ねました。

包みをこの求道者たちと友達になるきっかけとなったあの糸でしばりました。そして私たちみんなからのプレゼントとしてそれを差し出したのです。ジョンとエイプリルは眼を輝かせ、お母さんは感激していました。彼らは今、初めて金版の物語を手にしたのです。

バスはいつの間にか停留所のすぐ近くまで来ていました。モルモン経をプレゼントしてからほんの数分後でした。予期していた長旅も、これほど温かい気持ち芽生えてきた今となってみれば、本当に短く感じられます。私はすがすがしい気持ちでした。小さな宣教師たちも同じ気持ちだったと思います。まさに自分たちの手で土壌を整え、種を播いたのです。希望に満ちた別れだといってしまえば、そうですが、やっぱり別れはさびしいものでした。

私は夫と一緒に走り去って行くバスに向かって手を振りました。ジョンとエイプリル、そしてお母さん、お父さんが白い服に身を包んでバプテスマの水に入るのを待っている姿が頭に浮かんできました。いつか、きっと教会員になると思います。その時、私はバスの中でみたまに導かれて伝道したことをうれしく思い、心に温かいものを感じるに違いありません。そして、今度、旅をする時は、必ずモルモン経を詰めていこう！私はこう自分に言い聞かせるのです。





何としても 戒めを守りなさい

七十人第一定員会会員
ジーン・R・クック

私は少年の頃、主の戒めを守ることの大切さをときどき疑いました。例えば、自分の額の額があまりに少ないので、主には自分のそんな自分の一が本当に必要なかと考えました。また、安息日を聖くすることがどれほど大事なことから、疑問に思ったりもしました。もちろん、主が私の従順さやお金を必要とされているのではなく、主の戒めに従って得られる霊の成長や祝福を受けるために、私の方こそ戒めを守ることが必要なのだということは、あとになってわかったのですが。

私は11歳の時に、初めて新聞配達の仕事をしようと思いました。ところが新聞配達は12歳以上ということで、11歳になったばかりの私はまるまる1年早かったのです。それでも立派に働けることを大人にわかってもらおう

とがんばりました。そして、父の応援もあって、ではやってみてもらおうということになったのです。

私が新聞配達という大仕事をきちんとやり遂げることができたのは、少年の私を主が祝福して下さったからだと思います。新聞配達は私にとってためになる仕事でした。年若いうちから、集金やお金の管理やいろいろな人との接し方や購読の勧誘の仕方などが学べました。収入の10分の1は、いつも喜んで主に捧げていました。

5年間そうして新聞配達をしたあと、16歳の時に、副主任になって町中の新聞少年の監督をしてほしいと配達主任から頼まれました。これには少々びっくりしましたが、若い自分にとってたいそう名誉なことなので、私は主

に心から感謝しました。これは、さらに自分が成長してひとまわり大きくなるために、主から与えられた祝福だと思ったからです。

私は副主任として2年間働きましたが、あの時受けたチャレンジは決して忘れられません。当時私は什分の一をきちんと欠かさず納めていて、什分の一の原則を確かに信じていましたが、証はまだまだ小さいものでした。

仕事を終えた土曜日の午後のことでした。配達主任が、さっそく翌日から私に日曜の朝にも仕事をしてもらいたいと言うのです。配達主任は不活発でしたが教会員なので、私が良い返事をしないだろうということは知っていました。そして彼は、神権会と日曜学校は出席できないとしても何とか別の集会には出られるだろうからたいしたことではないでしょう、と言うのです。そして、日曜日に働くことについて私の気が変わるように、給料を3割増しにすると行ってしきりに誘うのでした。

その言葉に強烈に引かれたことを覚えています。でもそれに対する返答もよく覚えています。「日曜日にはどうしても働けないんです。」

配達主任は、「そうかね。日曜日に働いてもらえなければ、別の副主任を捜すとしよう」と言いました。

その日、私は沈んだ気持ちで店を出ました。教会のためになぜ職を失わなければならないのですかと主に尋ねたことを覚えています。伝道資金を貯めるために一生懸命働いてきたのに、日曜日に働かなければ仕事をやめさせられるなんて。

私は父に相談しました。父はただ、「君なら正しいことができると思うよ。何であろうとね」と言っただけでした。私は自分で決心しなければなりません。私は、今の私に

対する主のみこころを知る以外にその解決法はないと感じました。

次の土曜日、私は主任の所へ行き、日曜日にはやはり働きませんと告げました。すると主任から、そういうことならあと1週間限りで副主任はクビにして、代わりに「喜んで働く」少年を見つけると言われました。

その日、私はあと5、6日で職を失う思いながら重い気持ちで帰宅しました。伝道までまだ1年もあり、資金は足りませんでした。その週、私は何度もお祈りをしました。

それからの毎日は仕事をしていて非常に長く感じられました。主任とはほとんど話をしませんでした。最後の日となる土曜日をただ待つだけでした。

とうとう金曜日になりました。夕方仕事を片付けていると、主任がやってきて幾分感情的にこう言いました。「ジーン、君のしていることは正しいよ。日曜日に働いてほしいなどと言ってすまなかった。日曜日でも働く男の子が見つかるには見つかったが、やっぱり君に副主任をしてもらいたいんだ。安息日には働かなくてもいい。給料を3割増しにするよ。君は立派な少年だ。」

そのとき胸に込み上げた感謝の気持ちを、私は決して忘れることができません。その月、什分の一を余分に納め、日曜日の責任を心を込めて果たした気持ちは、いつまでも忘れられないと思います。

主は、たとえ少年でも天の祝福を豊かに注いで下さいます。収入の什分の一を納めることや安息日を聖く守ることの大切さを、教えて下さいます。主の戒めは、どんな犠牲を払っても守るだけの価値があります。

歴史に残る末日の予言者の説教



啓示とあなた

ハロルド・B・リー大管長

第11代大管長ハロルド・ビンガム・リーは、1899年3月28日に、サミュエル・マリオン・リーとルイザ・エメリン・ビンガムの息子として、アイダホ州クリフトンに生まれた。1941年4月10日に、ヒーバー・J・グラント大管長より使徒に聖任され、1970年1月23日に十二使徒定員会会長として支持された。同日、70歳にしてジョセフ・フィールディング・スミス大管長の第一副管長に召された。そして3年後の1972年7月7日に第11代大管長となったリー大管長は、大管長として1年数カ月務め、1973年12月26日74歳で他界した。

十 二使徒評議員会のジョン・A・ウィッツ
オー長老は、ある時ステーキ部役員との
集会の模様を次のように話してくれた。その
話し合いの中である人がウィッツオー長老に、
「ウィッツオー兄弟、教会が啓示を受けたの
は最近ではいつですか」と質問したという。
すると長老は考え深そうにあごをこすりなが
ら、こう答えた。「そうですね。多分先週の木
曜日でしょう。」ウィッツオー長老は毎月第一
木曜日に開かれる大管長会と十二使徒定員会
の集会のことを意味していたのである。

聖典の中には次の聖句が繰り返し言われて
いる。「耳のある者は聞くがよい。」(マタイ11
:15) 私たちのだれもが、聞くべきすべての
ことに耳を傾けられるよう祝福されているわ
けではない。

このようなことがあった。主が十字架上の
苦しみをお受けになる直前のことである。主
が宮にいますと、群衆の中にいたギリシャ人た
ちが、このように騒ぎたてられているイエス
にぜひ会いたいと言ってきた。すると主は、
聖なる地にひざまずき、この時から自分を救
って下さるようにと祈りを捧げ、「父よ、み名
があがめられますように」と言われた。する
と答えがあった。「わたしはすでに栄光をあら
わした。そして、更にそれをあらわすであら
う。」(ヨハネ12:28) それを聞いて雷がなっ
たのだという者もいれば、み使いが話しかけ
たのだという者もいた。このように、聞く耳
を持ちながら聞かなかった者もいるのである。

また、パウロの改宗の時の出来事を思い出
されるであろう。彼はダマスコにいる聖徒た
ちを迫害するために添書を携えてダマスコ
に向かっていた。彼が光に打たれて目が見え
なくなったことは皆様よく御存じのはずであ
る。その時天から声が聞こえた。「サウロ、サ
ウロ、なぜわたしを迫害するのか。」(使徒9
:4) パウロはその時のことをこう話してい
る。「わたしと一緒にいた者たちは、その光は
見たが、わたしに語りかけたかたの声は聞か
なかつた。」(使徒22:9) 彼らもまた、耳を

持ちながら何も聞かなかつたのである。

私たちの中には、義しい生活を送っていな
いために、神が語られる永遠のメッセージを
理解できない人々が大量にいる。しかし、もし
私たち一人一人が神の戒めに従い、ふさわし
い生活を送ることを決意するならば、私たち
の内に驚くほどの変化がもたらされ、私たち
は目に見えない世界からのメッセージを聞くこ
とができるだろう。

数年前私がステーキ部長をしていた時のこ
とをお話したいと思う。

それは悲しむべき出来事だった。ある家族
持ちの兄弟を、美しい若い女性に暴行を加え
たかどで、高等評議員会およびステーキ部長
会に召喚しなければならなかつたのである。
徹夜同然の会が終わり、破門に処するという
結論を得た後、私は重い足取りで事務所へと
向かった。するとそこには、その兄弟の兄だと
名乗る男がいて、こう言った。「言っておきま
すが、私の弟はあなたの方が言うようなこと
は何もしちゃいけませんよ。」

私は尋ねた。「なぜそう断定できるのです
か。」

「祈ったんですよ。主は弟は無罪だと教え
て下さつたのです。」

私は彼を事務所へ招き入れ、こう言った。
「立ち入つたことになるかもしれませんが、
私の質問に答えていただけますか。」

「ええ、どうぞ。」

「お幾つでいらっしゃいますか。」

「47になります。」

「神権の職は何ですか。」

彼は教師だと思う、と答えた。

「知恵の言葉を守っておいでですか。」

「いいえ。」タバコを吸っていることはすぐ
わかつた。

「什分の一は納めていらっしゃいますか。」

「いいえ。」彼は、あいつが第32ワード部の
監督をしている限り納めない、と言つた。

私は言つた。「神権会に出席していらっしや
いますか。」

彼は答えた。「いいや。彼が監督をしている限りは出ませんよ。」

「聖餐会にも出ていらっしゃらないのですね。」

「はい。」

「家族の祈りはしておられますか。」

「いいえ。」

「聖典は勉強してらっしゃいますか。」

目が悪いからなかなか読めないとのことだった。

そこで私は言った。「私の家にはラジオというすばらしい道具があります。どこも故障が

なければ、ダイヤルを合わせるだけで遠い所で話したり歌ったりしている声が聞こえるんですよ。時には地球の裏側の声も、まるで私の家にその人がいるかのように。でも、長いこと使っていると、真空管という部品がだんだんだめになってきます。1本だめになると音声ははっきりしなくなりますし、もう1本やられるともういけません。野球放送など聴いていると、一番いいところでブツンと消えてしまったりしますからね。そしてそのまま放っておくと、見た感じは全く変わらない

私には信じる心がある。それは子供の時に得た小さな証の上に築かれたものである。……見えないところから語りかけてくれる人がいることを知ったのである。私はその声を聞いた。



5歳当時のリー大管長

のですが、中味は全然違ってしまって、スイッチをひねっても何も聞こえなくなるんですよ。」

「さて」私は続けた。「あなたも私も、今話したラジオの真空管に相当するものを体の中に持っています。『聖餐会出席』真空管、『知恵の言葉』真空管、『什分の一』真空管、『家族の祈り』真空管、『聖典研究』真空管などと呼ばれるものです。そして、その中で一番大切な働きをするのは『道徳的に清い生活をする』真空管です。もしもこれらのひとつでもだめになると、すなわち戒めを破ると、私の家のラジオが遠く離れた所の電波をキャッチできなかったような状態が、私たちの霊に起

こるのです。」

私は言った。「さて、パイオニアステーク部の中で最も立派な人々が15人、昨晚共に祈りました。そして証言を聞いた彼らは、口をそろえて、あなたの弟さんは有罪だと言ったのです。しかし、戒めを全く守っていないあなたが神に祈って反対の答えを受けた。どう説明しますか。」

彼の答えは典型的なものだった。「リー部長、私は間違ったところから答えを得ていたようです。」おわかりのように、これこそ偉大な真理である。私たちは従うところのものから答えを受ける。悪魔の戒めに従えば悪魔から答えを受けるし、神の戒めを守れば天父から導

きと指示を受けるのである。』

私はブリガム・ヤング大学で、J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長から、靈感あふれる説教を聴いたことがある。彼は様々な種類の啓示を分析している人だった。彼は最初に神の顕現について話し、それが御父または御子あるいは御二方が実際にみ姿を現わされること、あるいは直接人に語りかけられることと定義している。モーセは主と顔を合わせて語り、ダニエルは神の現われ、すなわち個人的な訪れを受けた。主がバプテスマのヨハネからバプテスマを受けた時、天から「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」(マタイ3:17)という声がしたのをよく御存じだろう。先に申し上げたパウロの改宗にあっても、神のみ力が現われははっきりとした声が聞こえた。また変貌のあった時も、ペテロ、ヤコブ、ヨハネは主について高い山に登り、そこでモーセとエリヤに会い、またも天から声を聞いた。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。」(マタイ17:5)

私たちの時代における最大の顕現は何と言っても、森の中で御父と御子が予言者ジョセフ・スミスにみ姿を現わされたことであろう。それ以来、幾度か顕現があった。そのひとつは救い主がジョセフとオリヴァに現われたことであり、それは教義と聖約第110章に記されている。

私には信じる心がある。それは子供の時に得た小さな証の上に築かれたものである。子供の頃私は父に連れられて、家からかなり離れた農場に出かけ、父が仕事を終えて帰る時まで独りで遊んでいた。柵越しに古い小屋があり、それは私の冒険心をかき立てた。柵を越えようとした時、私の名を呼び、「あそこへ行ってはいけない」という声を聞いた。父ではないかと思ってふりむいたが、父の姿はない。あたりには何の人影もなかった。その時私は子供心に、見えないところから語りかけてくれる人がいることを知ったのである。私

はその声を聞いた。

私たちが啓示を受けるもうひとつの方法は、予言者イノスが語っている方法である。イノスは森へ行って、主からみ業を進め、記録をつけるように命じられた後、次のような非常に重要な言葉をモルモン経の中に記している。『私がこのように精神こめて祈っている中に、……主の御声が私の心に聞えて仰せになった……』(イノス10)言い換えると、私たちは時時主の声が私たちの心の中に聞こえるのを耳にする。そしてその声が聞こえると、その印象は主がラッパを私たちの耳もとで吹かれたのではないかと思われるほどに強いのである。

私はこのことでささやかな証を申し上げたい。ある時私は助けを必要としていた。ある重要な使命を帯びていたからである。主は私が助けを必要としていることを知っておられた。私は朝突然目がさめた。それは私が反対の方向に計画していたあることを正すために、だれかが私を起こしたような感じであった。その朝私が横になっていると目の前にはっきり(次の朝何をし、何を言うべきかについて)示された。だれかがベッドの端にすわって私に何をなすべきかを教えてくれたかのようにはっきりしていた。

私たちは主の教会の一員として、聖霊の力によって個人的な啓示を受けることができるのである。主は教会初期の時代に、予言者ジョセフ・スミスに次のように言われた。「然り、見よ、われ今汝に來りて汝の心の中に留るべき聖霊によりて汝の智と情に告げんとす。そもそも、見よ、これは啓示の『みたま』なり。」(教義と聖約8:2—3)予言者ジョセフ・スミスはこう述べている。「聖霊を受ける人は、いかなる人でも啓示を受けることができる。聖霊は啓示を与える御方である。」(*Teachings of the Prophet Joseph Smith* 「予言者ジョセフ・スミスの教え」 p. 328)

ここで話を末日聖徒と関連づけてみたい。すでにバプテスマを受け、権能を有する者から按手札を受け、「聖霊を受けよ」と告げられ

ていながら、まだ聖霊のみたまによる啓示やその人に約束されている聖霊の賜を受けていない人がある。これは極めて重大なことである。予言者ジョセフ・スミスが、啓示について述べている言葉を引用しよう。

「人は啓示のみたまに近くあることを感じるとすぐさま恵みを受ける。例えば、純粋な英知が流れ込んだと感じる時、あなたは純粋な英知が突然のひらめきを与えるのを感じるであろう。それに気づくと、その日あるいは間もなく、その啓示されたことが実現されるのを知るであろう。すなわち、神のみたまによって心に示された事柄は実現するのである。このように神のみたまを知って理解することにより、あなたは啓示の原則の中であって成長し、やがてイエス・キリストのうちにあって完全な者となるのである。」(同上、p. 151)

では、あなたは何に関して啓示を受けることができるのだろうか。聖霊を受けたすべての教会員が啓示を受けられると聞いて、あなたは驚くかもしれない。しかし、大管長に代わって啓示を受けたり、自分の属するワード部やステーク部、伝道部の諸事に関する啓示までも受けたりすることはない。すべての人は、その責任の範囲内において、聖霊より啓示を受ける権利を持っているのである。

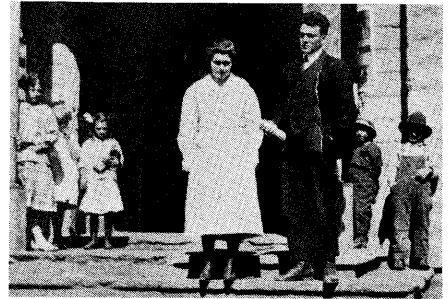
だれもが、自分自身に関して、自分の子供の育て方、仕事の管理、自らの行動についてこれらの賜と特権を行使する権利を授かっている。この啓示と靈感のみたまによって、すべてに賢く聡明に、また義しくあることは人に与えられた権利である。私は、これが真の原則であることを知っている。このことを末日聖徒たちにわかっていただきたいと思っている。私たちはこの突如としてもたらされる聖霊の導きに聞き従うようにしようではないか。もしそれらに耳を傾けるなら、このようなみたまの導きに対して私たちの耳はさらに敏感になり、啓示のみたまを一層受けやすくなるであろう。

啓示が下される方法として、もうひとつの

方法がある。それは夢である。と言っても、私は見る夢すべてが主からの直接の啓示であると申し上げるつもりはない。しかし、私たちの中には、夢が何の目的もないものであると軽視する人がいるようである。しかし、聖典の各所には、主が夢によってその民に導きを与えられた出来事が記されている。

このことについて、パーレー・P・ブラットは次のように述べている。

「あらゆる時代あらゆる神権時代であって、神は夢という手段を通して人類に大切な導き



ハロルド・B・リー大管長は19歳の時、正式な教育者としての第一歩を踏み出した。この時すでに、彼はアイダホ州で小学校の校長を2年間も務めていたのである。

と警告を与えてこられた。人が眠りに陥り、肉体の活動が静まり、精神の緊張がほぐれて無意識な状態になった時、霊的な感覚がある程度まで解放されてその機能を果たし、天上の世界の記憶や前世での懐かしい光景をおぼろげに思い出すのである。

そこには、彼らと血縁関係にある霊たちが、この上なく深い愛と心配の気持ちを寄せながらさまよっている。そして相互の純粋な永遠の愛に包まれて、霊は霊に交わり、思いは思いに応え、魂は魂に融合するのである。このような状態の中で、霊体（私たちに霊を見ることができるとすれば、霊にも目や耳、口があることがわかるであろう）は、神と言葉を交わり、天使や完全な者となった人の霊と交わるのである。」私たちが、知識を重視するあまり目に見えないところからの力を軽視するという域を脱することができるならば、啓示として私たちを導く夢を見ることもできるのである。

神の啓示はすべての知識を判断する際の基準となるものであり、啓示と一致しないものは、真理でないことを私たちは知ることができるだろう。

私は、天使に近く生活している人々と席を同じくする者のひとりとしてここにいる。私は毎週大管長会と十二使徒評議員会の前に持ち出される事柄を見ている。そしていろいろな決定が下されるわけであるが、その基準は理屈ではなく、心に感じたこと、つまり決定が下された後に、見守りと導きを与えるために天から送られた指示であることを確信するかどうかである。

重要な決定が下された後に、大管長の口から「兄弟たち、主がそう言われています」という言葉を聞くことは、実に感動的なことである。

私たちのすべてが努めなければならないのは、主の戒めを守り、主が私たちの祈りに答えて下さるような生活をするることである。私たちがふさわしい生活を送るなら、主は個人

的な顕現によって、あるいは実際に語りかけられることによって、また私たちの心にささやきかけられたり、霊に何らかの働きかけをされたりして、私たちを導いて下さるのである。私たちを特に慰めるために、永遠の素晴らしさを明らかにし、警告や導きを示す夢を主が与えて下さるとすれば、それほど喜ぶべきことはない。確かに、私たちがふさわしい生活をする限り、主は私たちの救いと幸福のために導きを与えて下さるのである。

謹んで証申し上げたい。私はみ声と啓示の力によって、神が存在することを知り、理解している。

大会から1週間ほど後のことであった。私はラジオ放送のために救い主の生涯に関する話を準備しようと、救い主の生涯や十字架上

私たちのすべてが努めなければならないのは、主の戒めを守り、主が私たちの祈りに答えて下さるような生活をするのである。

の刑、復活などの出来事を繰り返し読んでいた。その時、主が確かに生きておられるという証を得たのである。これらの出来事が単に記録にとどまらず、あたかも自分が実際にその場にいるかのように、その光景を眺めていたのである。私は、これが生ける神の啓示によるものであることを知っている。

私は、この教会が今日啓示によって導かれている教会であることを、へりくだり証し上げる。聖霊を受ける恵みにあずかった人であればだれでも啓示を受ける力をいただいている。神の助けがあって、私たちがいつも義しい生活をし、忠実な者の祈りに答えて下さるよう祈っている。

効果的な 伝道活動

スペンサー・W・キンボール大管長



効果的な伝道活動の理想の姿は、教会員が求道者を見だし、専任宣教師が教えることである。この方法をとれば、従来の伝道に関する多くの問題は解決するであろう。会員が求道者を見つけ、一人一人がフェローシップに関心を持つならば、途中で来なくなる求道者はほとんどいないし、またそのような会員の愛を受けてバプテスマを受けた人は、後々も積極的に主のみ業に参加する。このように会員が主体となって伝道した場合のもうひとつの利点は、たとえたまたまの交流ではあっても、モルモンが特別な健康法を持っていること、日曜日は教会で過ごし魚釣りやゴルフには出かけないこと、さらには教会のプログラムに対して喜んで寄与していることを、求道者がいち早く感じることである。

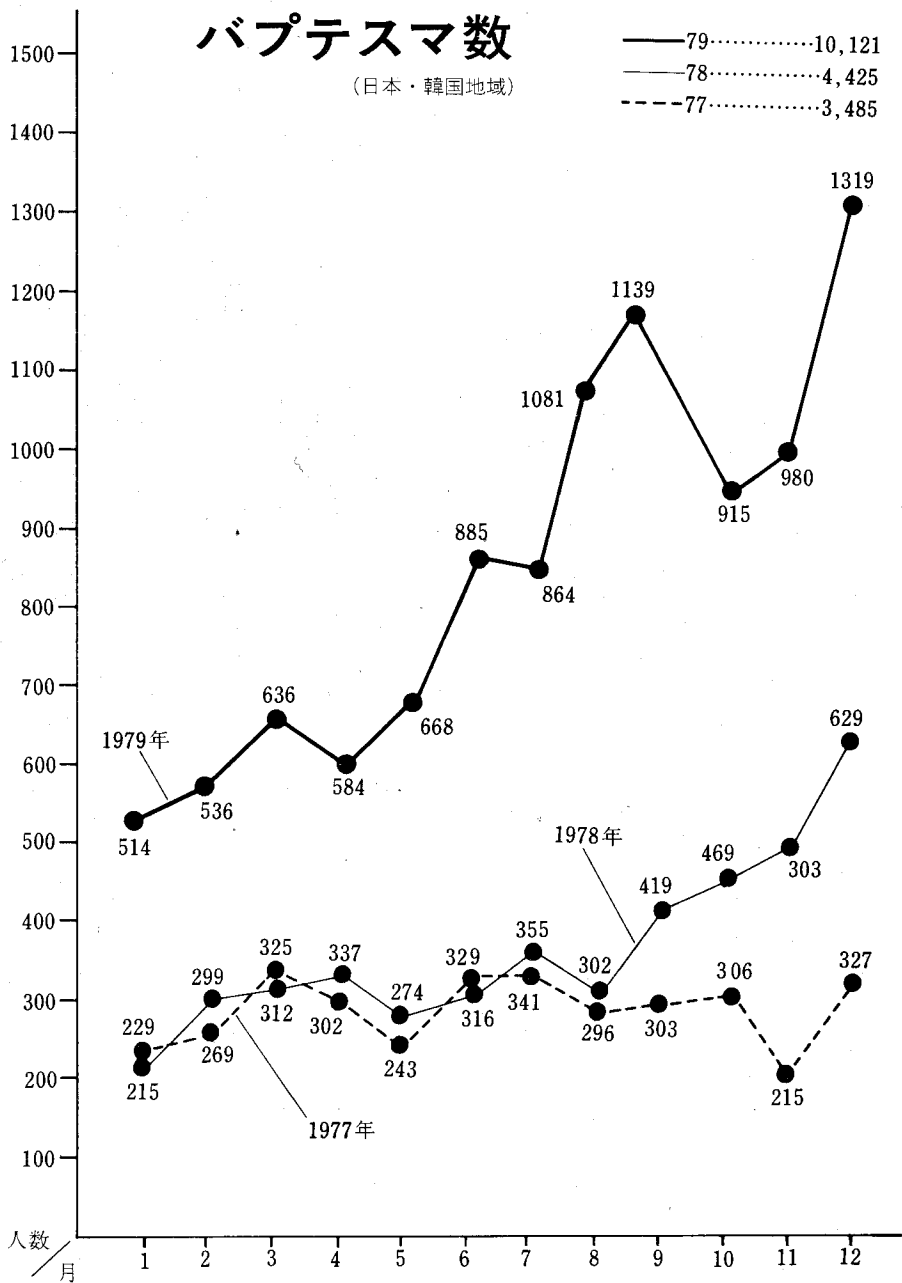
私たちの目標は、将来バプテスマを受けて神の王国に入る霊的な備えのできた天父の子供たちをできるだけ早く見いだすことである。その最も良い方法は、あなたの友人、親戚、隣人、知人を早く専任宣教師に紹介することである。長い期間フェローシップする必要もなければ、絶好の時を待つ必要もない。必要なのは、彼らが選民であるかどうかを見分けることである。「わが選民はわが声を聞き、その心を頑固にせざればなり」（教義と聖約29：7）とあるからである。彼らが福音を聞き、福音に心を開くかどうかはすぐにわかる。もし彼らが耳を傾けず、その心が頑固で、疑いを持ったり否定的な意見を述べたりするようであれば、そういう人はまだ準備ができていないのである。しかしその場合も、引き続き彼らに愛を示し、フェローシップの手を差し伸べて、次の機会を待つようにしなさい。そうすれば彼らの友情を失うことなく、一層の尊敬を得るようになるであろう。

（『隣人を警むる責任あり』「聖徒の道」1977年11月号、p.559より）

バプテスマ数

(日本・韓国地域)

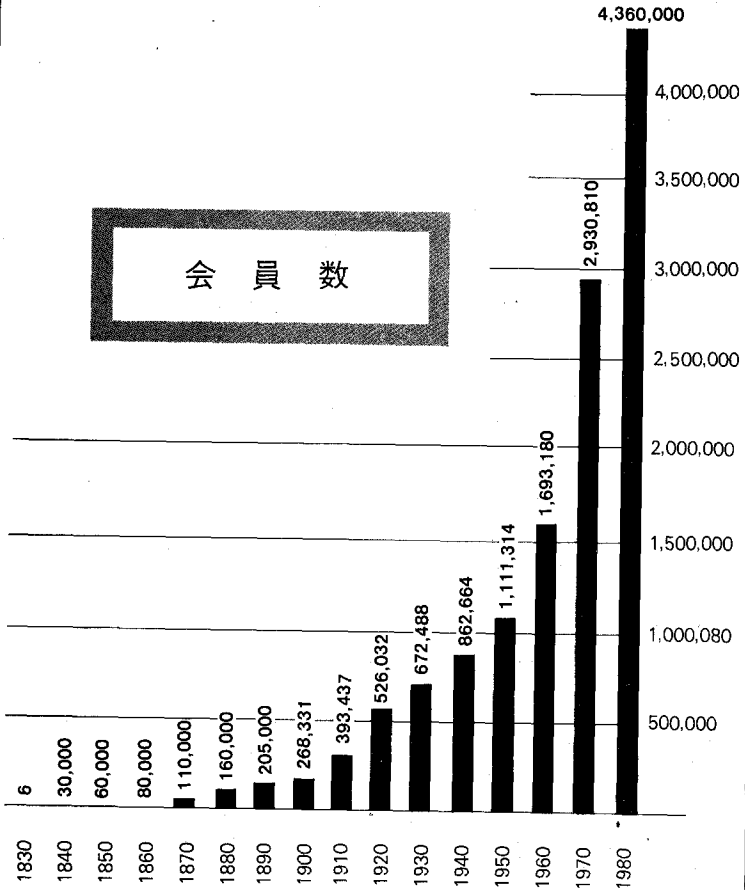
— 79.....10,121
 — 78.....4,425
 - - - 77.....3,485



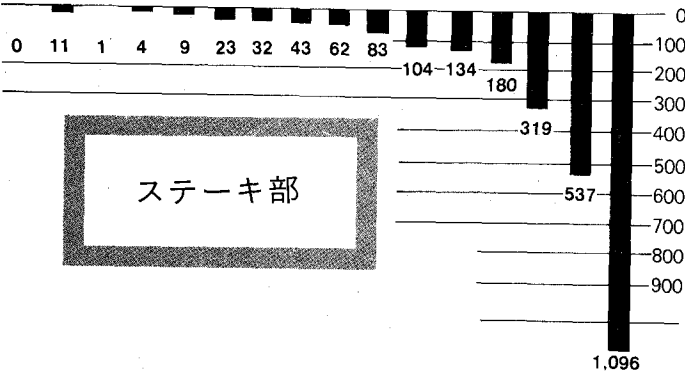
改宗者がいなければ教会は力を失い、減びてしまうだろう。しかし、教会が伝道活動を行なう最大の理由は、福音を聞き、受け入れる機会を世の人々に与えることである。

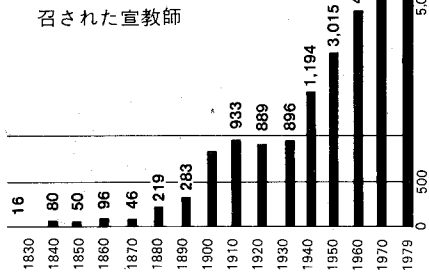
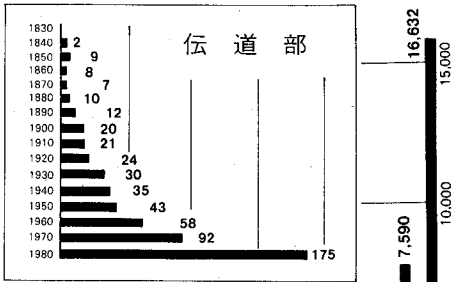
スペンサー・W・キンボール大管長

会 員 数

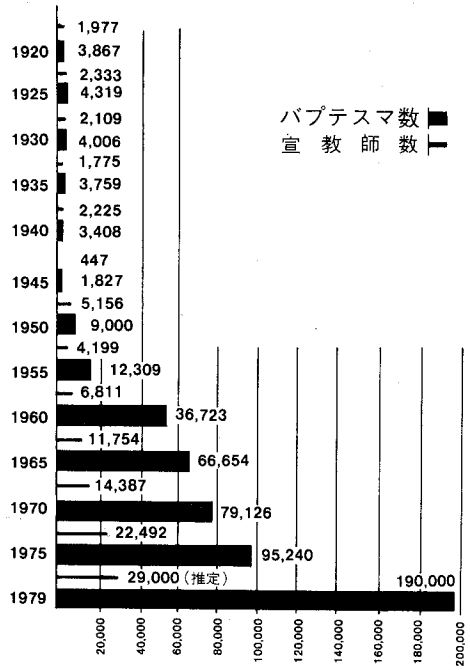


ステーキ部

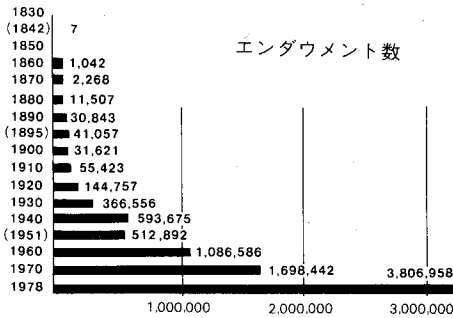




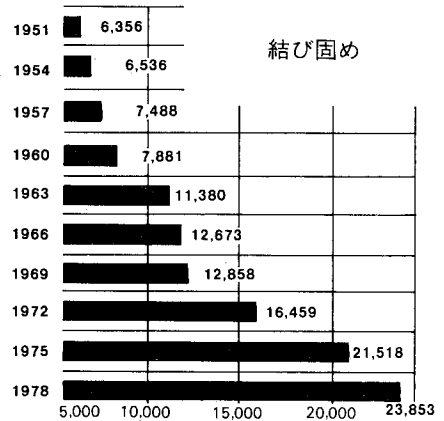
日本の兄弟姉妹も伝道に出ましょう



子供たちに伝道の備えをさせましょう



神殿の参入に備えましょう

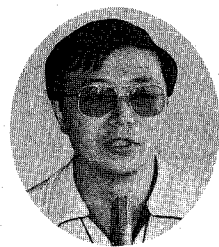


日本教会歴史編纂委員会 組織される

1979年11月9日、田中健治長老が日本教会歴史編纂委員会委員長として召されました。

証 あかし

福音にそった作家生活



東京第6ワード部
稲村直彦

私は日本の教会員の中で、小説を書いて生計を立てている、数少ない専門作家のひとりであろうかと思えます。

私が改宗したのは、8年前で、当時の私は某大学院修士課程で理系の研究者を目指して勉強していました。しかし、不幸にして途中で椎間板ヘルニアに冒され、学究生活を断念せざるを得なくなりました。といえますのも、私の研究には、重い実験器具や栽培植物の鉢の移動が毎日欠かせなかったからです。

当時は就職難の時代で、退学して病気に支障のない就職口を捜すこともできず、やむを得ず私は、それまで趣味として書いていた小説で身を立てよう、と決心しました。大学を休み、ヘルニアの苦痛にうめきながら寝床で原稿を書き、完成すると出版社に持ちこんで編集部に見てもらおう、という生活が始まりました。

しかし、書いても書いても採用されず、私は毎日必死になって祈り、神様の助けを求めました。しかし、いっこうに助けらしいものは与えられませんでした。

毎日の食費を400円に切りつめ、無駄な買い物は一切せず、大学からもらう奨学金と、それまでに貯えた食料で生活を支えて、頑張り続けました。たとえ神様に見はなされようと、これ以外にも自分の進路が考えられなかったからです。

このすさまじい生活を始めて6カ月後、初めて短編小説を一作、採用してもらうことができました。2万円の原稿料でした。これで作家への道が開けた、と小躍りして喜んだのもつかの間、それからもやはり、書いても書いても売れない日々が続きました。

第2作が採用になったのが更に6カ月後で、その原稿料も2万円、そしてまた6カ月、採

用を断られる日々が続きました。1年半かかってたった4万円の収入、これが私の作家生活のスタートでした。

しかしその後、突如として書く原稿のほとんどが採用になる日が始まりました。そして同時に、神の祝福に心から感謝できるようになりました。それはまさに、奇跡の連続としか表現することのできない祝福でした。

マラキ書の什分の一の律法のところに「これをもって私を試み、私が天の窓を開いてあふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさい」と祝福が約束されていますが、什分の一を納めると必ずその翌日か翌々日に新しい原稿の依頼が来るようになり、私は神様の力に、感謝を通り越して畏敬の念を覚えました。その時に感じたことは「神様は自分の努力によって伸びることのできる間は人間を助けず、努力が満ちて向上した時に初めて助けて下さる」ということです。

どうやら収入も安定し、困窮時代に私と婚約して精神的に支えてくれた現在の妻と結婚することができました。

それから修業時代とは打って変わって経済的にも恵まれた生活が始まりましたが、なぜか子供にだけは恵まれず、これはやはり何か神様にお返しできることで、私達のまだやり残していることがあるのではないだろうか、と妻と話し合いました。その時に思い至ったのが、宣教師の援助、ということでした。

その時に、ひとりの教会員に出会いました。彼女は伝道に出たいという強い希望を持っていましたが、必要な伝道資金を貯えることはむずかしい状態でした。私は妻と共に祈り、彼女の伝道を全面援助しよう、という結論を出しました。

奇跡は、その翌日にやって来ました。当時空前の人気のあった「宇宙戦艦ヤマト」を映画化するに当って、その小説部門の執筆をしてほしい、という依頼が来たのです。この執筆者の候補には、著名なベテラン作家等に混って、なぜか新人の私の名前があがっていた

のです。西崎プロデューサーが、その時に限って私の他の作品を読んでみる気になり、その結果、白羽の矢が立った、ということでした。その決定の下された時刻が、伝道に出る姉妹の援助のために、私が妻と共に祈っていた、ちょうど同じ時刻でした。

小説はベストセラーになり、私たちは余裕を持って彼女を援助できるようになりました。また独立プロダクションを設立することができました。

私は自分の会社の最初の企画として、私のオリジナル作品の映画化を考え、いろいろな所に持ちこみを始めました。しかし、映画界という所は非常に複雑な世界で、色々な障害にぶつかって、一向に実現の気配を見せませんでした。そんな時に、病気その他の事情で伝道に出ることの遅れていた姉妹が、召しを受けて伝道に出ました。

すると再び奇跡が起り、あれほどスムーズにいかなかった映画化（作品「きらめきの季節」）の話がとんとん拍子にまとまり、大手映画会社に配給されることになりました。また念願の子供にも、とうとう恵まれて、女兒を得ました。

またこれと前後して、「銀河鉄道999」を映画化するに当っての小説部門執筆依頼が、原作者から来ました。これも大ヒットになりました。これは、決して私だけの力ではなく、ひとえに神様の助けであり、祝福であることを、はっきりと皆さんに証し申し上げます。私は、自分のわずかばかりの奉仕を、何百倍もの祝福にして返して下さる神様に、ただただ感謝するばかりです。

この証の全てをイエス・キリストの御名を通して申し上げます。アーメン。

（末日聖徒を主人公とした「少年検事補・白鳥暁」シリーズで77年に作家としてデビュー。現在、日本ジャーナリストクラブ会員。ペンネーム・若桜木虔）

